COMPOST

vol. 01

2020

Archival Research Center, Kyoto City University of Arts

芸資研
GEISHIKEN

資料編

目 次

京都市立芸術大学芸術資源研究センター設立構想（2014年1月）抜萃
004

芸術資源研究センター概要（2015年3月）加治屋健司
013

芸術資源研究センター 研究活動一覧

1. 重点研究プロジェクト
017

2. センターとしての研究事業
020

2019年度活動報告

研究プロジェクト
021

アーカイブ研究会
038

芸資研・よりあいのまとめ
044

芸術資源研究センター スタッフ一覧
047

京都市立芸術大学芸術資源研究センター設立構想（2014年1月） 抜萃

はじめに

文化の継承と創造、芸術と社会をつなぐセンターを

京都市立芸術大学芸術資源研究センターは、京都という文化芸術の巨大なアーカイブとも言うべき「まち」に位置するという利点を最大限に生かしながら、新たな視点で文化資源をさまざまにとらえなおす調査研究の基盤（プラットホーム）である。

センターは、世界に誇る連綿たる文化の伝統をつなぐ京都の地で、人々の暮らしに深くかかわってきた美術や音楽を学び、調査研究し、創造・発信する本学の特性を生かして、新たな創造の可能性を貪欲に探求する場であり、過去と現在、未来が、また国内外のあらゆる世代の人々が交差・交流することで活性化する触媒的機能を持つ場である。

1. 設立趣旨

京都市立芸術大学は、1880年に日本初の公立の絵画専門学校として開設された京都府画学校を母体とする日本で最も長い歴史を持つ芸術系大学である。1950年、京都市立美術大学に移行し、1969年、京都市立音楽短期大学との統合が図られ、更に2000年には日本の社会に根ざす伝統音楽・芸能を総合的に研究することを目指して、日本伝統音楽研究センターを設立し、今日に至っている。この間、国内外で高く評価される美術家、音楽家を輩出してきた燦然たる伝統がある。

本学では2013年4月に、アーカイバルリサーチセンター準備室を設置し、これまでの実績を受け継ぎ、「温故知新」の精神に立って豊かな未来へと繋いでいくため、単なる保存ではないアーカイブのあり方や、芸術創造を専門とする大学にふさわしいアーカイブの創造的な活用法についての検討を重ねてきたところである。

そこで、京都市立芸術大学が、これまで蓄積して来た芸術作品や各種資料、あるいは展覧会や演奏会を含む教育に係わる記録、更には新たに収集あるいは寄贈された資料等を芸術の分野を超える創造のための資源として扱うことで、分野ごとに分断されてきた従来の記録資料の扱いとは異なる視点から研究するとともに、今まで充分に光が当てられていなかった非芸術的領域においても、芸術文化創造の資源となりうるものを研究・開拓し、そこから生み出された成果を、芸術のみならず社会の多方面に発信活用し、創造的な芸術文化を醸成していくため、芸術資源研究センターを設立することとした。

芸術に関するアーカイブ研究は、近年急速に発達して来た領域である。従来の芸術研究、あるいは一般的なアーカイブ研究と異なる点は、一つのまとまった資料体を特定の方向から価値判断することなく、等価な情報の集合として扱うということにある。このように資料を扱うことによって、従来の伝統的な価値判断によって処理済とされていた芸術資料からは見落とされていた創造的な側面が明らかになって来ることが期待される。つまり、従来のような作品本位の見方では価値の低いものとみなされていた資料が、新しい研究方法によって他の情報と結びつくことで、全く予期しなかった価値を創造する資源へと変化するのである。

また近年、芸術に関わるアーカイブ構築の方法として、「オーラルヒストリー」が新たな領域として注目されている。これは芸術作品という「もの」ではなく、それと関係する様々な人から、その人が体験した多様な情報としての「こと」を引き出して記録することで、作品や創造活動が生まれた環境を広い関係性のもとで捉えなおす芸術研究の新たな方法である。

芸術資源研究センターでは、学内の諸施設、諸機関との連携でこういった研究活動を積み重ね、市民はもとより、国内外の研究者、アーティストに公開し、芸術資源の更なる活用を図っていく。

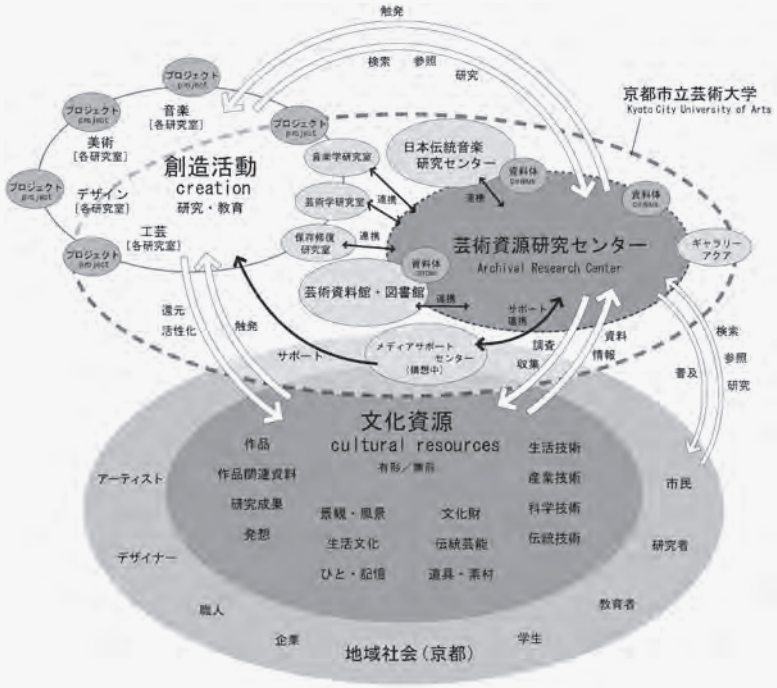
2. 事業目的

美術学部、音楽学部、日本伝統音楽研究センター、図書館、芸術資料館というそれぞれ独立した機関を横断的につなぎ再編するあたらしい研究基盤（プラットホーム）を形成することを目的とする。

本学内の各機関において、これまで長年にわたり蓄積され保管されている教育研究の成果や収集してきた資料（芸術資料館収蔵品（学生の卒業作品・旧教員の作品及び美術工芸に関する参考資料・写生や粉本・書簡等）、演奏記録、日本伝統音楽研究センター研究記録・古楽器・SPレコードなど）等は、単なる記録や保存資料ではなく、新たな芸術の創造と教育に活

用されるべき「芸術資源」である。本センターでは、これら学内諸機関に蓄積された資料だけでなく、研究や教育の場で今日も無数に生まれつつあるさまざまな成果を、新たな視点からアーカイブし、解読・編集するなかで、分野や時代を超えた創造のための資源として活用する研究を行う。

また、美術館や産業技術研究所等の他機関と連携して、この「創造のためのアーカイブ」創出の試みを行うことで、新たな創造や研究を促進し、芸術文化と産業の振興、そして市民生活の質的向上に寄与することを目指す。



文化の継承と創造、芸術と社会をつなぐ
芸術資源研究センターの位置づけ

3. 事業の概要

芸術資源研究センターでは、これまで専門分野ごとに研究されてきた資料を分野を超えた「芸術資源」として包括的に捉えなおすこと、そのうえで再定義された「芸術資源」を「創造のために生かす」ことを前提として、継続的に行う基礎的事業と、一定期間で総括する重点事業を設定し、その普及を図る。

(1) 基礎的事業

ア. アーカイブ理論の研究

芸術分野におけるアーカイブ理論は、近年になり取り組まれてきた領域である。本学の芸術資源研究センターでは、現在構想中のメディアサポートセンターと連携し、他の芸術系学術研究機関に先駆けて、本格的な理論研究に取り組む。

具体的には、芸術分野を対象としたアーカイブの意義や可能性、国内外のアーカイブに関する調査、画像・音響・映像などデータの状況に合わせたデジタル化の手法やデータ規格の統一のあり方、適切なデータベースの設計と公開の方法、知的財産権の処理方法の研究などがあげられ、これらの研究成果は、公表の上、学生への教育に順次組み込んでいくこととなる。

なお、アーカイブデータにおける知的財産権、すなわち著作権や著作隣接権（著作物そのものの創作にはあたってはいないが、実演家、レコード製作者、放送事業者及び有線放送事業者など、著作物の公衆への伝達に重要な役割を果たしている者に与えられる権利。実演家の場合では、録音権・録画権・放送権などがこれにあたる。）等に関しては、率先課題として扱う。現行の著作権法等の規定を遵守することはいうまでもないが、まず、学内で教職員と学生の著作権帰属と利用についてのガイドラインを定める必要がある。ガイドラインの定め方により、アーカイブデータの公開範囲が変動し、開かれたセンターとして公開できるアーカイブ確保への影響が大きい。まず、「学内における著作権及び著作隣接権の取扱い要項（仮称）」の策定が必要である。この規定では、近年各大学が導入を推進し、本学においても導入を検討中のオープンアクセス機能を持つ研究活動の知的生産物のインターネット上の書庫である機関リポジトリとの関わりも十分考慮しなくてはならない。

また、本学の芸術資料館や日本伝統音楽研究センターなど各機関で収集・保存してきた芸術資源について、新たな創造活動や研究へ活用でき

るよう、アーカイブ理論に基づく体系化、データベース化を推進する。芸術資料館の絵手本・粉本類のデータベース化並びに日本伝統音楽研究センターが有する全国唯一の貴重な文化財類のデータベース化は本学の中期計画でも明記された事業であるが、今後はアーカイブの活用の観点からも体系を見直し、新たな資料の収集方針に反映させていく。

イ．資料体の調査収集と活用

アーカイブ化する資料体を社会への還元として活用するためには、まずその調査と収集、学内組織それぞれが連携して多様な活用を図るための手法が確立している必要がある。このため、単なる整理ではなく、資料体の創造的な活用のための再配置について、試行的実践を重ねながら追求していく。

なお、本構想策定のため調査に伺った東京大学総合研究博物館の西野嘉章館長は、実物資料の有用性と個性的な収集の重要性を強調された。

従前より芸術資料館、日本伝統音楽研究センターでは、本学ならではの特徴ある資料を収集している。これらの資料体は、アーカイブ化でもできるだけ原形をとどめることが基本であるが、芸術資料館の一部資料のように劣化が進み、データ化のための写真撮影を行うため補修を要するものも存在する。予算を効率的に執行する観点からも、アーカイブ化において、整理と活用の視座からデータベース化する収蔵資料についての優先基準を設定することが必要となる。これらの資料は悉皆調査するとともに、優先順位に従い、良質のデータベースとして複合的な活用を図れるよう検索の汎用性を担保するテキストを付加して整理していく。アーカイブ化には単なるデータベース化を上回る人的経費を必要とするため、年次計画を立てて推進していく。

さらには、これらの進捗に合わせて、デジタルデータの活用によるウェブ上の音楽図書館や楽器ミュージアムについても立ち上げを目指す。

ウ．アーカイブの教育の場での活用

大学とはもとより一つの巨大なアーカイブであって、教育や研究・創作はその活動の一環とみなしうる。芸術の歴史を踏まえて創造するのがアーティストであるとしたら、その創造を芸術の歴史に位置付けるのが研究者である。そして、アーティストと研究者の双方が持っているアーカイブへの関心を架橋し、未来の人材が歴史と創造の関係を学び、将来の活動に必要な能力を身につけるための手ほどきをするのが教育者である。

大学における日常の教育・研究において、アーカイブを、いわば歴史に代わる思考実験の場として用い、初学者に対して、歴史に向き合うための訓練を施す。歴史を踏まえて創造を行う能力、創造を歴史の中へと位置付ける能力、この二つの能力の育成を行うことで、学生の新たな研究（創作活動）への寄与が期待される。教育者・研究者であり、アーティストでもある実技系教員と、芸術理論に関わる教員の双方がこうした教育・研究に携われることは、本学だからこそ行い得る独自の大学教育・研究の成果を生むであろう。

例えば、センターにおけるこうした取組の中で活用が期待される事業の一つが、美術学部の「総合基礎実技アーカイブ」である。

(2) 重点事業

（省略）

(3) 広報

（省略）

(4) 年次計画

（省略）

4. 開かれたセンターへの取組

(1) 市民への還元

研究成果を地域等に還元していくため、本学では「地域資源を活用した大原野活性化プロジェクト」、「登り窯を中心にした清水焼技術の研究と継承」などに取り組んできた。芸術資源研究センターにおいても、学外機関と連携した、教育、文化、産業等の振興や地域活性化等に寄与するシンポジウム等の活動、他機関との共同研究に積極的に取り組んでいく。

また、芸術資料館や日本伝統音楽研究センターでも、地域や各種団体と連携し、展覧会やワークショップを開催し、多彩な形での市民への還元を目指す。

市民への還元事業

・「芸術資源研究センター」の研究、事業の成果発表

・本学の各機関と連携した取組の発表
・オリジナル資料の保護のため、複製品を用いた“触れる展示”
・複製品の小中学校貸出しによる、芸術鑑賞・芸術情報教育
・さまざまな記譜の可能性の研究成果を生かした失語症･発達障害における作業療法など臨床の現場への応用

（2）他機関等との連携

芸術資源研究センターは、他機関とも積極的に交流し、研究内容を高めその成果を発信する。国内外から研究者を受け入れ、研究の発信や多様な活用を行うとともに、幅広い世代の市民等に向けた普及活動の実施に努める。

ア．京都市内の各美術館・博物館・資料館

京都市内博物館施設連絡協議会や京都・大学ミュージアム連携等の組織を通して、美術館・博物館等が所蔵する京都に関わる作品・資料等のアーカイブ活用に向けての連携を推進する。

イ．国内外の大学等の研究機関

開かれた研究機関として、国内外から積極的に研究員（客員研究員）を受け入れ、研究の充実と成果の発信に努める。具体例としては、立命館大学アート・リサーチセンター、慶応義塾大学アート・センターや明治学院大学図書館付属日本近代音楽館のアーカイブ、学習院大学のアーカイブ学など実践と理論両面からの連携や、ヴィラ九条山等のレジデンスアーティストと共同でのアーカイブ活用イベントの実践等があげられる。

ウ．企業・業界団体並びに関連施設

京都市産業技術研究所、西陣織工業組合や清水焼団地協同組合等の業界団体、企業とも連携を図り、芸術と産業の振興を図る事業の実践を目指す。資料体の保存修復については、技術者を擁する業界団体とのタイアップを特に強化し、研究及び修復作業の進展を図る。

エ．京都市内小中学校、高等学校

アーカイブを活用した創造活動のワークショップを開催する。小中学生等との交流を糧に、子供たちの感性を取り込み、それを生かして新たな事業を創出する。

オ．地元を中心とした市民との連携

地元住民と協働した地域アーカイブの作成や市民から提供される資料による地域振興事業を企画。感覚記憶地図の作成で個人の記憶と場所をつなぎ新たなコミュニケーションの構築を図ることなどが考えられる。

5. 組織

（省略）

6. 予算

（省略）

7. 課題

芸術に関するアーカイブ研究においては、未知の要素が多く、道を切り拓くうえで、学内外の協力が不可欠である。特に情報機器の利用に関しては、ハード・ソフト両面で逸材が求められる。本学においては、別途「メディアサポートセンター」構想も進捗中であり、この構想と芸術資源研究センター事業は少なからず関わりを持つことから、同構想のすみやかな進捗が待たれるところである。機器の維持管理、情報取り扱いに係る規程整備など、双方に合理的で汎用性のあるものでなくてはならない。

また、本学は近い将来の移転を目指している。新校舎竣工までの期間において建物の大規模改修は避けねばならないため、芸術資源研究センターの業務に必要なスペースは、当面、現行スペースの中から確保する。

さらに少数の専任教員のみでの本構想の実現は望むべくもなく、多くの兼担教員を配置し、緊密なチームワークのもとで業務を推進することが必要となる。芸術資料館、附属図書館、ギャラリー@KCUA、日本伝統音楽研究センター、美術学部保存修復専攻との関係をより整理し、それぞれの機能の充実を図ることが前提となる。

厳しい財政事情の中で、大学をあげて予算を確保するため、国をはじめ

外部資金導入の検討を進めねばならない。研究費の各種助成金獲得には、なお一層の努力が必要である。

独自性を発揮し、他大学が追随できない成果を挙げる研究を提起し、実践し、発信していきたい。

これらの努力を重ね、地道にその成果を発表し続けていくことが、地元をはじめとした多くの市民からの本学の支援につながるであろう。

こうした課題のもとで、本学全体が一丸となって芸術資源研究センターを設立し運営していくため、運営委員会が果たす役割は非常に重要である。

8. 今後の展望

京都市立芸術大学は日本の芸術系大学の草分けであり、日本の美術史や音楽史に有用な資料を多数所蔵している。その活用を図るため、附属図書館・芸術資料館・日本伝統音楽研究センター図書室等が連携してアーカイブの整備に努めていくのはいうまでもない。これらのアーカイブはすべてが公開に適したものではなく、公開の是非についても基準を定める必要がある。財政が厳しい中にあっても、アーカイブ担当者の継続的雇用を図り、執行体制の充実に努めていく。

また、これらの事業は、これから芸術資源研究センターで行う事業ともども、機関リポジトリ等の取組で研究資料の公開が促進されることと適切な関わりを持つ必要がある。

さて、本学においては、大学の内外で日々創り出される本学関係者の新たなアートあるいはアートシーンを記録し、世界に発信することも大きな課題である。本学ならではの発信には実験的要素が不可避となるであろう。成果が成果を生む循環が構築されるまでには数年を有するかもしれないが、伝統と未来に向けた創造をつなぐ本学こそが挑むべき道である。

さまざまな新機軸のアートの実践、地道な調査と研究が三位一体となって大きな果実を残して行き続けるために、芸術資源研究センターが核となりその役割を果たしていかなければならない。

初出：京都市立芸術大学アーカイバルリサーチセンター準備委員会編（2014）『京都市立芸術大学芸術資源研究センター設立構想』京都市立芸術大学。

芸術資源研究センター概要（2015年3月）

加治屋健司

はじめに

芸術資源研究センター（以下、芸資研）は、2014年4月に京都市立芸術大学（以下、京都芸大）に設置された研究機関である。芸資研は、京都芸大及び京都の芸術作品や各種資料等を芸術資源として包括的に捉え直して、将来の新たな芸術創造につなげることを目指している。2014年度は、所長を筆頭に、専任研究員1名、兼担教員3名、プロジェクト・リーダー8名、非常勤研究員4名、特別招聘研究員2名という体制で研究活動に取り組んでいる。英語名称はArchival Research Centerであり、学内では構想段階から発足直後までARCと呼んでいたが、現在では芸資研という略称を用いるようにしている。

研究内容

芸資研の研究活動は、基礎研究と重点研究に分かれている。

基礎研究とは、センターの活動の基礎となる研究で、継続的に取り組んでいる。「アーカイブ理論の研究」「芸術資源の調査収集と活用」「アーカイブの教育の場での活用」の3つの研究からなる。

（1）アーカイブ理論の研究

アーカイブとは、従来の公文書館から芸術表現の方法まで、様々な意味で用いられている。芸資研では、芸術及び芸術大学におけるアーカイブの可能性を検討し、その理解を深めるために、識者を招いたアーカイブ研究会を随時開催している。

（2）芸術資源の調査収集と活用

芸資研は、京都芸大が所蔵する芸術作品や各種資料を中心に芸術資源を調査収集し、創造的に活用する予定である。芸資研は発足したばかりなので、収蔵庫も収蔵品・収蔵資料も持っていない。芸術資料館や附属図書館と連携しつつ、学内各所に点在する芸術資源の目録作成を進めると同時に、将来的には京都を中心とした学外の芸術資源も含

めて、その創造的な活用を推進したいと考えている。

（3）アーカイブの教育の場での活用

アーカイブの発想や方法は、芸術教育においても有効である。芸術家は、芸術作品によって構成される芸術の歴史を踏まえて制作してきたが、現代の芸術家が制作時に向き合う多様な情報環境は、芸術作品に限定されない資料や情報を含んだアーカイブに例えることができる。現代社会にふさわしい創作能力を育成するために、アーカイブの発想や方法を芸術教育に取り入れたいと考えている。

重点研究とは、多様な専門分野をもつ学内外の研究者が時限的に推進する研究で、プロジェクト・リーダーが中心となり、一人もしくは数人の研究者からなる研究チームによって実施している。現在、「オーラル・ヒストリー」「記譜プロジェクト」「富本憲吉アーカイブ・辻本勇コレクション」「森村泰昌アーカイブ」「総合基礎実技アーカイブ」の5つの研究を行っている。

（1）オーラル・ヒストリー

芸術関係者に聞き取り調査を行い、オーラル・ヒストリー（口述資料）として記録・保存、研究する。京都における本学ゆかりの作家を中心に、戦後日本美術、京都画壇、フルクサスに焦点を当てる。

（2）記譜プロジェクト

楽譜研究の手法を基盤にして、日本の伝統音楽や民俗芸能、西洋音楽の記譜法を研究すると同時に、作品や創作プロセスも含めて記譜法を広く捉え直すことで、記譜を新たな芸術創造の装置とみなし、その表現の多様性を探る。

（3）富本憲吉アーカイブ・辻本勇コレクション

京都芸大に日本初の陶磁器専攻を創設し、教授、学長を務めた富本憲吉の書簡資料等の寄贈を辻本勇氏より受けたことを踏まえ、「富本憲吉アーカイブ・辻本勇コレクション」として整理、活用を図る。

（4）森村泰昌アーカイブ

名画の人物や著名人に扮する作品で知られる、京都芸大出身の現代美術家である森村泰昌に関する文献資料のデータベースを構築して活用する。

（5）総合基礎実技アーカイブ

美術学部の新入生全員が各専攻に分かれる前に受講し、分野を横断する柔軟な基礎力の育成を図る授業「総合基礎実技」の課題と成果を資料化し、芸術教育に新たな展望を開くことを目指す。

芸術資源とは何か

芸資研の名称には、芸術資源という言葉が入っている。京都芸大は、構想段階ではアーカイバルリサーチセンターという名称を用いていたが、発足の際に芸術資源研究センターになった。構想の策定に携わった教職員によれば、「アーカイバル」という言葉に、アーカイブに限定されない広範な活動の可能性を込めていたが、市当局との交渉のなかで現在の名称になったという。つまり芸術資源とは、構想の最初からあった概念ではないのだが、この言葉には大きな可能性と広がりが感じられないだろうか。

芸術資源に似た言葉に、文化資源がある。これは、2000年に東京大学大学院人文社会系研究科に誕生した文化資源学研究専攻で採用され、2002年には文化資源学会が設立されて広く知られるようになった。文化資源学会によれば、文化資源とは「ある時代の社会と文化を知るための手がかりとなる貴重な資料の総体」であるが、そのままでは「多くの資料は死蔵され、消費され、活用されないまま忘れられて」しまう。したがって、「埋もれた膨大な資料の蓄積を、現在および将来の社会で活用できるように再生・加工させ、新たな文化を育む土壌として資料を資源化し活用可能にすることが必要」であるという。つまり、文化資源という言葉には、文化を形成してきた厖大な資料体を、新たな文化を生み出すために活用しようという思いが込められている。

では、芸術資源という言葉には、いかなる可能性と広がりがあるだろうか。芸術もまた、「死蔵され、消費され、活用されないまま忘れられて」しまうことはある。そもそも、美術館や歴史の本の中で、単なる過去の記

録として扱われてきた作品は無数にあるし、美術館には、収蔵したものの一度も展示する機会がない作品や、創作物でありながら二次的な価値を与えられてきた作品資料もある。芸術家の仕事場には、制作の過程で生まれたもので、作品とは言えないが創造的な価値をもつ有形無形のものがあるし、社会に存在する様々な事物に、芸術的な価値をもつものもある。また、芸術大学の教育の場において作られる無数の物と形も、同様に考えてよいかもしれない。それらは、従来の芸術史においては、考察の対象にならないことが多かった。だが、新たな作品を生み出し、新しい芸術の歴史を紡いでいくためには、こうした作品や事物に改めて目を向けることが必要なのではないだろうか。現在、芸術概念はますます変化の途をたどり、芸術史自体も絶えず書き換えられている。芸術資源という考え方が可能にするのは、従来の芸術を新たな創造のために活用することだけでなく、芸術の再解釈や芸術史の再編を通して過去の芸術を再賦活化すること、社会の様々な事物を芸術の観点から捉え直すこと、さらには、芸術大学の教育を含めた制作のプロセスで生まれたものに意味を与えることでもあるだろう。芸術は、文化とは異なる背景を持つ言葉であり、芸術家による実践の蓄積と長年にわたる複雑な議論がある。それゆえ、芸術資源という言葉は、文化資源とは異なる視点から歴史と社会を認識することを可能にすると同時に、理誰と実践の双方において新たな創造を生み出す契機を含んでいると言えるのではないだろうか。

芸資研は、こうした観点から芸術資源の問題に取り組んでいきたいと考えている。講演、シンポジウム、公演、出版物、ウェブサイト等を通して研究成果を報告するので、今後の活動にご注目いただければ幸いである。

初出：加治屋健司（2015）「芸術資源研究センター概要」『芸術資源研究センターニューズレター』（創刊号）京都市立芸術大学芸術資源研究センター事務局。

芸術資源研究センター 研究活動一覧

1. 重点研究プロジェクト

●印＝プロジェクトリーダー

2014-

オーラル・ヒストリー

芸術関係者に聞き取り調査を行い、口述された内容をオーラル・ヒストリー（口述資料）として記録・保存、研究します。本学ゆかりの作家を中心に、「戦後日本美術」「京都画壇」「フルクサス」に焦点を当てた研究活動を展開しています。

「戦後日本美術のオーラル・ヒストリー」
●加治屋健司

「京都・近代絵画の記憶」（＊2018年度「京都画壇のオーラル・ヒストリー」から変更）
●松尾芳樹

「フルクサスのオーラル・ヒストリー」（2018年度終了）
●柿沼敏江

記譜プロジェクト

西洋音楽の記譜法、日本の伝統音楽や民俗芸能を研究し、その解析や再現を進めます。同時に、作品や創作プロセスを含めて記譜法を広く捉え直し、記譜を新たな芸術創造の装置とみなし、表現の多様性を探ります。

「音と身体の記譜研究」（＊2017年度「西洋音楽の記譜研究」から変更）
●竹内 直

「感覚のアーキペラゴ」（＊2018年度「未完の記譜法」から変更）
●高橋 悟

「伝統音楽の記譜法からの創造」（＊2018年度「伝統音楽・芸能の記譜研究」から変更）
●武内恵美子

富本憲吉アーカイブ・辻本勇コレクション

富本憲吉記念館創設者辻本勇氏からコレクションの寄贈を受け、本学の前身である京都市立美術大学に陶磁器専攻を創設した元学長富本憲吉ゆかりの書簡等の資料を調査研究し、中間成果として書籍「富本憲吉『わが陶器造り』」を2019年に刊行した。
●森野彰人

総合基礎実技アーカイブ

本学美術学部の新入生全員が各専攻に分かれる前に受講し、分野を横断する柔軟な基礎力の育成を図る授業「総合基礎実技」の課題と成果を資料化し、芸術教育に新たな展望を開くことを目指します。
●井上明彦

2015-

うつしから読み取る技術的アーカイブ

「高細密複写」と違い、「写し」や「模写」はその行為を通じ作品の背景を読み解き、技法、素材を後世へと引き継ぐ大事な役割があります。「写し」「模写」を技術、技法、素材から考察し、そのアーカイブの可能性と汎用性を模索します（※2016年度「法隆寺金堂壁画における「複写と模写」」から変更）。
●彬子女王殿下

音楽学部・音楽研究科アナログ演奏記録デジタル・アーカイブ化

本学には音楽学部創設以来の貴重な演奏記録が保存されていますが、収録当時の記録媒体は寿命が短く、劣化が激しいものがあります。これらのデジタル化を進め、整備活用のために調査を行います。
●山本 毅

奥行きの感覚のアーカイブ
絵画や彫刻をはじめとするさまざまな芸術作品に感じられる「奥行きの感覚」が研究対象です。この感覚の背後には、視覚にとどまらない共通感覚や、複雑な仕方で読み解いている多様な情報や質が存在します。そうしたものを検討・整理、アーカイブしながら「奥行きの感覚」の客観化を目指します。
●中ハシ克シゲ

美術教科書コレクションアーカイブ作成
本学美術教育研究会が長年にわたり収集した明治時代からの図画工作・美術教科書は図書館に寄贈され、現在1400冊以上のコレクションを形成しています。美術だけでなく教育や社会の歴史を辿るうえでも非常に重要かつ貴重なこれらの教科書は、経年劣化が著しいため、アーカイブ化し、今後のさまざまな活用に向けての道を拓きます。
●横田 学

Sujin Memory Bank Project
過去を保存し未来へと継承することは、アーカイブに期待される機能の一つです。残されたものの事後の検証・活用に、写真を含む映像が果たす役割や可能性について、実践的な立場で研究に取り組み、ワークショップ等で考察を深めます（＊2018年度「映像アーカイブの実践研究」から変更、2018年度終了）。
●林田 新

京都工芸アーカイブ
少子高齢化による工芸の担い手不足は京都の伝統産業において最も深刻な課題となっています。本プロジェクトでは未来の学生や研究者が、過去を知り制作や研究に活かすことのできる工芸情報をアーカイブすることを目的としています（＊2018年度「京焼海外文献アーカイブ」から変更、2019年度「京都工芸海外アーカイブ」から変更）。
●前﨑信也

2016-

美術関連資料のアーカイブ構築と活用
名画の中の人物や著名人に扮する作品で知られる森村泰昌（1951-）や、仏教美術、京都の文化、また美術作家の作品や展覧会の記録など幅広く撮影し続けた写真家井上隆雄（1940-2016）らの、各種関連資料のアーカイブ構築と活用について実践的に取り組みます。
「森村泰昌アーカイブ」
●加須屋明子
「井上隆雄写真資料に基づいたアーカイブの実践研究」
●山下晃平

2017-

現代美術の保存修復／再制作の事例研究―國府理《水中エンジン》再制作プロジェクトのアーカイブ化
2014年に急逝した國府理（本学美術研究科彫刻専攻修了）の《水中エンジン》（2012年）の再制作プロジェクトの記録と関連資料のアーカイブ化を行います。また、動態的な作品における「同一性」「自律性」の問題や、作品がはらむ本質的な批評性と「再制作」の関係など、この再制作のプロセスが提起するさまざまな問いについても検討します。
●高嶋 慈

みずのき作品群の保存とアーカイブ作成への協力と作業支援
社会福祉法人松花苑（京都府亀岡市）によるみずのき美術館（同市）所蔵作品群の保存状況の改善とアーカイブ作成（保存の為の再整理作業、画像撮影、作品記録リスト作成、引っ越し作業等）への協力および作業支援を通じて、「みずのき寮絵画教室」とその作品群の実態調査を行なう（2018年度まで）。
●中原浩大

ASILE FLOTTANT 再生～ル・コルビュジエが見た争乱・難民・避難～
ル・コルビュジエがデザインした難民収容船のリノベーションが完成することを機に、「ル・コルビュジエが見た争乱・難民・避難」をテーマとした展覧会とシンポジウムを東京で開催した。また、パリのセーヌ川に係留されている船の内部で現代日本建築家展を行い、出版も行う（2017年度のみ）。
●辰巳明久

2018-

京都美術の歴史学―京都芸大の1950年代―
本学の戦後の再出発となった1950年代に焦点をあて、新たに実施された教育カリキュラムについて、美術史・社会史・教育史の横断的観点から研究します。
●菊川亜騎　深谷訓子

崇仁小学校をわすれないためにセンター
京都市崇仁地区では、2023年の芸大移転にともなって、建築物やモノや風景のありようが、急速に変化しています。記憶を呼び起こす物質的な「よすが」と、それによって喚起される個々人の記憶の両方を創造的に記録・保管・継承する方法を、コミュニティ・アーカイブ的な手法を用いながら実践的に研究します。
●佐藤知久

2019-

美術工芸のリソースに関するアーカイブズの試行
美術工芸品を形作る制作道具やそれを用いた技は、作品のリソースとして極めて重要な存在ですが、保存活用の手立てに十分な仕組みがありません。そこで、公共機関や地域・所有者などと協働しつつ、資料調査のあり方や実物保存および活用の方向性の仕組みの構築を試みます。
●畑中英二

バシェの音響彫刻プロジェクト
1970年の大阪万博で制作された17基のバシェの音響彫刻のうち、これまでに修復された6基の音響彫刻の構造と響きを体系的なアーカイブに残し、部材の劣化を防ぐメンテナンスを施すと共に、まだ復元されていない部材についても調査します。またそれらを用いた新たな創造活動の可能性を探っていきます。
●岡田加津子

原版と銅版画作品のアーカイブ
著作権等の問題から通常は廃棄されてしまう銅版画の原版を、技法・素材など関連資料の記録や、刷られた作品とともに保存することで、高度な技術力を必要とする銅版画技法を継承し、実践的な資料として研究し活用します。
●大西伸明

絵具に問う
絵画を彩る絵具は、画家が描いた痕跡である。よって我々は、画家が用いた材料や技法、表現の意図、画家がおかれていた状況などを絵具に問うことができる。本プロジェクトは、絵画からより多くを学ぶ環境を整えることを目的とし、保存修復専攻の研究活動によって得られた絵具に関する調査データのアーカイブを目指す。
●高林弘実

タイムベーストメディア作品アーカイブにおける鑑賞性の保存・修復・再創造
芸術資源研究センターで構築したダムタイプ作品《pH》のデジタル・アーカイブと仮想現実（VR）シミュレーターの更なる活用方法に関して研究する。シミュレーター内でのパフォーマンスの再現および情報技術を用いたアーカイビングの技法を探求し、VRによる作品鑑賞を介したアーカイブ閲覧の今日的可能性について検証する。
●砂山太一

2. センターとしての研究事業

2015

タイムベースト・メディアを用いた美術作品の修復／保存に関するモデル事業
（文化庁 平成27（2015）年度 メディア芸術連携促進事業）
せんだいメディアテーク、ダムタイプオフィス、国立国際美術館と連携して実施した事業である。本事業では、タイムベースト・メディア作品の典型として、古橋悌二《LOVERS――永遠の恋人たち――》（1994年）の修復・保存作業を行なった。また、海外機関における先行事例の調査を、ドイツ・カールスルーエ市のカールスルーエ・アート・アンド・メディアセンター（ZKM）、イギリス・ロンドン市のテートにて行なうとともに、国立国際美術館との共催で、シンポジウム「過去の現在の未来 アーティスト、学芸員、研究者が考える現代美術の保存と修復」を、また修復された《LOVERS》の公開とワークショップ「メディアアートの生と転生 保存修復とアーカイブの諸問題を中心に」を開催した。

2016

タイムベースト・メディアを用いた美術作品の修復・保存・記録のためのガイド作成
（文化庁 平成28（2016）年度 メディア芸術連携促進事業）
2015年度に行った《LOVERS》の修復と保存事業を実施する過程で得られた、タイムベースト・メディアを用いた作品の保存・修復・記録についての知見を、他の美術作品にも応用できる「ガイド」にまとめた事業である。ガイドは「タイムベースト・メディアとは」「ガイドの概要」「修復／保存の歩み」「資料」「用語集」「保管」「展示」「修復」「リーガル・デザイン」「来たるべきネットワーク」から成る。執筆者：石谷治寛、小川絢子、加治屋健司、砂山太一、水野祐、山峰潤也。以下URLにて公開中。http://www.kcua.ac.jp/arc/time-based-media/

2017-2018

ダムタイプ《pH》のシミュレーター制作と関連資料アーカイブ
（文化庁 平成29（2017）年度＋平成30（2018）年度 メディア芸術アーカイブ推進支援事業）
パフォーマンス、インスタレーション、出版などマルチメディアで展開された、ダムタイプの作品《pH》（1990-）のアーカイブ化事業である。「未来において《pH》を再演するとき、何が必要か？」という課題を設定し、「再演のためのスコア」としての3Dシミュレーターの作成と、再演に必要な資料のデジタル・アーカイブ化を実施した。2015年から行っているタイムベースト・メディア研究を、生身の身体動作をふくむパフォーマンス作品へ発展させたものである。デジタルなアーカイブの作成に加え、学生や若いアーティストが作業に参加することによる教育的効果や、オリジナル作品の制作スタッフやパフォーマーと記憶を共有するエコシステムの形成も進められた。

2019年度活動報告

研究プロジェクト

記譜プロジェクト「音と身体の記譜研究」

本研究プロジェクトは「記譜法（ノーテーション）」をテーマとして、芸術資源研究センターの発足時から継続しているプロジェクトである。発足時の研究テーマは「西洋音楽の記譜研究――書かれたものと響くもの」であり、2017年度からは「音と身体の記譜研究」を新しい研究テーマに設定し、活動を行ってきた。これまでの活動としては、「西洋音楽の記譜研究」のテーマのもとに、2015年度に「バロック時代の音楽と舞踏～記譜を通して見る華麗な時空間」、2016年度に「五線譜に書けない音の世界～声明からケージ、フルクサスまで～」をそれぞれ開催している。「音と身体の記譜研究」プロジェクトとなってからは、2017年度に民族音楽学者馬淵卯三郎の遺した1970年代のグアテマラ共和国における調査記録（フィールド・ノートおよび録音）を整理し、その一部をCD付き冊子『Un Trabajo del Profesor Usaburo Mabuchi de 1967――グアテマラ高地チャフル・イシルの縦笛と両面太鼓』としてまとめ、2018年度にはシンポジウムとコンサート「糸が紡ぐ音の世界」を催した。2019年度は、前年度末に本研究プロジェクト発足時より研究代表者を務めてきた柿沼敏江（本学名誉教授）が退官したことに伴い、新しい体制でプロジェクトに取り組むことになった。

2019年度は、過去5年間（2014～2018年度）のプロジェクトの蓄積を踏まえた上で、外部から様々な研究領域、研究テーマをもつ研究者を共同研究員として招き、各々の専門領域から「音と身体の記譜」について多角的に検討をし、議論する機会を設けることを課題としてスタートした。本研究プロジェクトでは記譜の概念を、演奏し、記録するための、いわゆる「楽譜」という枠組みにとどめてはいない。「書かれたもの（スクリプト）」を手がかりに、人類学者のフィールド・ノート、民謡の採譜（トランスクリプション）、音声の録音記録、身振りや舞踊の記譜などをも対象としながら、「記譜（ノーテーション）」を幅広い視野から捉え、考察することを目的としている。今年度の定例研究会では、6月に共同研究員の三島郁（西洋音楽史）、7月に米山知子（人類学）、10月に井上航（民族音楽学）、11月に非常勤研究員の滝奈々子（民族音楽学）が、それぞれの視点から「音と身体の記譜」についての研究発表を行った。

三島郁は17世紀後半から18世紀にかけての西洋音楽における鍵盤楽曲の記譜を対象に、音符の符幹の向きから多声的なテクスチャーとそれを演奏する身体との関わりを読み解いた。米山知子は伝承的身体表現において身体に刻まれる記憶をある種の記譜や記録とみなした上で、トルコのアレヴィーの身体技法セマーの伝承を、記憶やエージェント、イスラム都市文化における宗教的マイノリティのアイディンティといった観点から考察した。井上航の発表はカンボジアの山地民クルンの祈祷句ボボンにおける声と言葉のあり方について、転記（トランスクリプション）することを通して分析的に捉えたものであり、滝奈々子はグアテマラのロック・マヤの思想はいかに記述可能かという問題に取り組んでいる。いずれの発表においても、ノーテーションは狭義の「記譜」ではなく、書かれたもの（スクリプト）や記述するということ、当該の文化や社会を背景にして存立する身体や記憶という観点から捉え直されている。

本研究プロジェクトでは上記の研究発表とは別に、12月にルチャーナ・ガリアーノ（Luciana Galliano）氏によるフルクサスと記譜に関する講演、1月に井上春緒氏によるインドのタブラーの伝承と記譜法に関する研究ワークショップを開催した。

イタリアの音楽学者ガリアーノ氏の講演は「詩的な記譜：フルクサスの音楽概念」と題して、日本語で行われた。ガリアーノ氏は2018年に『Japan Fluxus』（Lexington Books）を出版しており、本講演はその著書の内容に準じたものであったが、氏はフルクサス結成前後のいわゆるプロト・フルクサス期の活動、同時代の様々な前衛芸術運動などにも触れながら、フルクサスを音楽面からわかりやすく解き明かしてくれた。ガリアーノ氏はフルクサスの言葉によって指示される記譜とイヴェントについて、とくに日本のフルクサスのイヴェント（およびフルクサス的な活動）には、ある一点に焦点を合わせるという特徴があるとし、その一点にパフォーマーと聴衆の意識が重なり合わさることで時間の共有体験が生じるとした。フルクサスにとってパフォーマンスは重要な要素の一つだが、それは記譜という音楽的な方法によって遂行されている。ここに、フルクサスにとって音楽性が不可欠な要素であったことを読み取ることができる。そのようなことを再確認できる講演であった。

民族音楽学者の井上春緒氏を招いての研究ワークショップでは、インドのヒンドゥスターニー音楽の中で用いられるタブラーの習得と記譜法に関する発表と、演奏家としても活動している井上氏によるタブラーと、シタール奏者の岩下洋平氏によるパフォーマンスが行われた。井上氏によれば、タブラーの習得は、伝統的には口唱歌を中心とした口頭伝承で行われてきたが、伝承の過程では、その口唱歌を備忘録的に書き留めるための簡易な記譜法が用いられているという。歴史的に遡ればそのような簡易な記譜以外にも、演奏の手順を詳細に記述するタイプの様々な記譜法が西洋音楽の影響を受ける形で考案されたというが、現在教授の場に残っているのは、口唱歌を簡潔に記した記譜のみである。井上氏はその理由について、ヒンドゥスターニー音楽にとって不可欠な即興性は、様々なリズムや旋律の型を身体に蓄え、それらを実践の場で自在に引き出すことによって生み出され得るもので、厳密な記譜によって担保されるものではないこと、そして簡易な記譜は、そうした型を身体に染み込ませるための備忘録としてのみ機能しているとした。ときに2時間を超えるパフォーマンスが繰り広げられるヒンドゥスターニー音楽では、その時間を持続することができるだけの即興性を身につけることが演奏家に求められるが、実際のパフォーマンスにおいて楽譜が用いられることはない。習得の過程に介在する記譜には、記し、残すという「ノーテーション」の役割を読み解く一つの鍵があるように感じた。

すでに記したように、本研究プロジェクトではノーテーションを「記譜」という狭い枠組みに限定せず、より広がりのある概念として捉えている。本年度の活動成果を基盤としながら、次年度以降も「音と身体の記譜」に関する考察をより一層深めていきたい。

（竹内 直）

記譜プロジェクト「未完の記譜法」展覧会「聞こえないを聴く・見えないを視る」レポート
2019年10月24日（木）—11月10日（日）崇仁地域周辺

先日、ロンドン大学ゴールドスミス校を拠点に活動するフォレンジック・アーキテクチャーのプレゼンテーションに接する幸運に恵まれた。フォレンジックとは科学捜査を指す言葉で、建築家、法律家、プログラマー、デザイナーなど異なる領域の専門家からなる調査集団がフォレンジック・アーキテクチャーである。彼らは、世界各地で発生している紛争、メディアや政府によって歪曲された犯罪についてデジタル・テクノロジーを駆使して調査し、対抗的な証拠をさまざまな場で公にすることで政治化する。その独自の方法のなかでも特に注目したのは、シリアの首都ダマスカス郊外のセイドナヤ刑務所における調査手法だった。刑務所に収監された人たちは、視覚情報を完全に遮断された暗闇での数ヶ月を過ごす。見ることだけでなく互いに話をすることも禁じられた中で、自分達がおかれた状況やこれから迫りくるかもしれない事態をとらえるために、収監者たちにできるのは闇の空間へ向けてじっと耳をすますことだけ。監視員の近づいてくる足音、建物内での反響音、かすかに聞こえる拷問によるうめき。これら音だけからなる記憶をてがかりに、フォレンジック・アーキテクチャーのメンバー達は、元収監者たちと協同でセイドナヤ刑務所の三次元モデルを再構築していった。Situated testimony というこの手法により、元収監者たちは細部に渡る記憶を再構成してゆくが、心理的なトラウマがあまりに強い場合、間違った記憶イメージが述べられる場合がある。たとえば直列しているはずの独房群が、円環状に配置されていたというように。フォレンジック・アーキテクチャーによれば、客観的な記述だけを証拠とする事に意味があるのではなく、この場合、歪んだ知覚として記述される事で当事者の極限の精神状態を明示する証拠となるという。

さて、「聞こえないを聴く・見えないを視る」事業の初年度は「CASE－1霧の街のアーカイブ」というコンセプトでプロジェクトを進めた。「霧の街」とは人口減少、災害、紛争などでコミュニティーの環境や生活の遺産が消えつつある状況をさすが、本事業では地域のドキュメントを映像や言葉ではなく身体感覚や音という環境記憶の背景に着目した記録法の可能性を探った。そのためサウンドアーティストの鈴木昭男氏と共に、京都市立芸術大学の移転を前に変貌を遂げる崇仁地域でのフィールドワークを重ね、身体に作用する複数の音のポイントを示す地図を作成した。この地図は紙に印刷したものと、スマートフォンで閲覧できるウェブ上のものがあり、プロジェクトが終了した後も、地図を片手に街の環境の変化を捉えることができる。さらにガイドツアー、展覧会、シンポジウムへと複数の角度からこのプロジェクトを検証する方向へと展開していった。現代の社会では、SNSや情報を通じて情動を刺激し行為を誘導するマーケティング戦略や公共空間で人の振る舞いを管理する不可視の力が拡散している。スリープモードの携帯電話に象徴される「常時ON」状態でつながりつづける時間の流れに対して、鈴木昭男氏の「日向ぼっこ」でぼうっとする技芸は、身体環境や時間の伏流から考え直す端緒をひらく。悪意に満ちた管理コントロールの下で息をひそめ、暗闇にじっと耳をすますセイドナヤ刑務所の人々と「日向ぼっこ」の空間を等価に重ね合わせるとき、私達は「聞こえない・見えない」記憶イメージへと導かれることになる。必ずしもそれらは幸福な記憶だけでないにしても。

（高橋 悟）

＊なお「点音マップin Kyoto（崇仁）」のGPSマップは左のQRコードからアクセスできます。

「伝統音楽の記譜法からの創造」

講演会の様子（講演：吳劍氏、通訳：方芳氏）

昨年度まで藤田隆則（日本伝統音楽研究センター教授）が実施していた「伝統音楽の記譜法からの創造」プロジェクトを今期から引き継いだ。昨年度までは日本の伝統音楽を対象としていたが、今年度は日本伝統音楽に影

響がありつつも中国の伝承が本家である古琴を対象とすることにした。

古琴は中国古来の伝統楽器であり、漢民族固有の楽器である。したがって、中国の伝統音楽の中で代表となる楽器・音楽を一種挙げるように言われた場合、それは古琴となると言っても過言ではない。実際、1977年に打ち上げられたボイジャーに搭載された、世界各国の代表的音楽を録音したゴールデンレコードに中国として選択したのは古琴であったし、2008年の北京オリンピックの際、開幕式で演奏されたのも古琴であった。

古琴は西周時代（B.C. 1046-256）にはすでに演奏されていたことが知られており、それ以後廃れることなく現在まで演奏され続けている稀有な楽器である。皇帝の修養の音楽であり、また孔子も演奏したことから儒家が演奏すべき楽器となり、さらに文人が演奏したことから道教的側面も内包した。漢代初期には楽器も現在の形となりその後ほぼ形を変えずに伝承された。

古琴は日本にも伝来し、主に平安時代と江戸時代に演奏されており、その影響は実は多大であったが、現在の日本ではほとんど演奏習慣がなく、またその歴史や音楽、理論等はほとんど知られていない。したがって今年度は、古琴の伝承とその芸術性について、北京在住で中国の国家級非物質文化遺産古琴芸術代表性伝承人の吳釗氏にお越しいただき、2019年11月7日（木）正午より、京都市立芸術大学新研究棟2階大会議室にて講演会を実施した。

内容は、記譜法の変化について、唐代の琴譜と明代の琴譜の相違、記譜の方法、記譜と実際の音との関係性、記譜と口伝の奏法の相違点、楽器の特性と音など、記譜を軸としながら多岐にわたるものであった。

平日の昼間にも関わらず、多くの来場者に恵まれ、その高い芸術性と精緻な理論、独特な記譜とそれから紡ぎ出される音の世界の特異性について、熱心に耳を傾けられた。質疑応答も積極的に行われ、2時間を超す非常に熱のこもった講演会であった。

演奏の様子

来場者は日本のみならず、中国・台湾からも10名を超す方々にお越しいただき、中国社会における古琴への関心の高さも伺うことができた。

古琴の記譜法と伝承法については、まだ多くの事象が存在し、一度では説明しきれなかったため、できれば次年度以降も継続して企画をしていきたいと考える。

（武内恵美子）

富本憲吉アーカイブ・辻本勇コレクション

今年度は富本憲吉をテーマとした2つの展覧会が開催されました。2019年6月29日から9月1日まで「企画展 富本憲吉入門―彼はなぜ日本近代陶芸の巨匠なのか―」が奈良県立美術館で開催されました。富本憲吉が評価をされている理由を分かりやすく紹介するという画期的な展覧会です。本学の芸術資料館所蔵の富本憲吉アーカイブから、富本がバーナード・リーチに宛てた書簡より、1915年に富本が安堵村に立てた新居の周辺と間取りを記した図が展示されました。

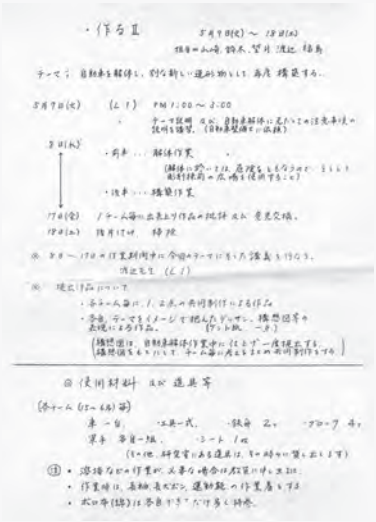
10月9日から12月19日まで「特別展 富本憲吉と會津八一～孤高の美の求道者たち～」が新潟市會津八一記念館で開催されました。富本と書家 會津八一（1881-1956）との交流や、周辺の作家たちに焦点をあてる初の試みです。富本は八一の最初の歌集『南京新唱』の挿絵を描き、八一が愛用した磁印「朔」「秋草堂」「渾斎」を制作しています。本展の図録には芸術資源研究センター客員研究員の前﨑信也が「富本憲吉が気になる人に伝えたいこと」を寄稿しました。

さらに9月28日から11月3日まで「京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品活用展：still moving library」が、ギャラリー@KUCAで開催されました。ここでは芸術資源研究センターが刊行した『富本憲吉 わが陶器造り』（里文出版、2019年）を題材にした展示を行いました。富本は学生のために書いた『わが陶器造り』の中で、本学所蔵の野々村仁清・尾形乾山の作品についてコメントしています。そこで、展覧会場では両作品とそれらに対する富本の言葉を展示しました。

書簡を中心とする辻本勇コレクションの整理は継続しています。来年度には詳細な報告を発表できるように進めています。

（山本真紗子）

総合基礎実技アーカイブ



課題「作る II」1985年、配布プリント

半世紀の歴史を持つ美術学部総合基礎実技のアーカイブ化の作業は、今年で6年目となる。毎年50万円の予算の枠内で、非常勤講師2名が授業のない後期に都合に応じて臨機応変に取り組む体制は同じである。今年度は井上舞、前田耕平の2名が12月2日～17日の土日を除く計12日間にスキャニングを中心とした作業を行い、昭和60（1985）年度から昭和62（1987）年度分の資料のデジタル化を行なった。

対象となるのはこの時期の手書き・青焼きの文書（「カリキュラム冊子」と称している）と、紙焼き写真やネガフィルム、スライドによる作品記録だが、80年代後半にはビデオテープによる動画記録も現われ、今後記録メディアの変化に対応したデジタル化の手段が課題となる。スキャニングは長時間を要するので、機材面の充実なども今後必要になる。それ以上に作業上の困難となっているのは、年度によって記録の対象や手段が異なること、さらに重要な基本記録の欠落である。当時は記録とその整理にさほど意識的でなく、一貫性がないのは仕方ないとしても、昭和56（1981）年、昭和58（1983）年は学生名簿すら見当たらない。かつて小清水漸先生（彫刻家、現名誉教授）が在任中、「70年代後半、アメリカから来た日本の美術大学視察団が総合基礎に関心を示して資料を求めたところ、未整理のため見せることができなかった」と言われていたことを思い出す。

さて80年代中期の課題内容だが、この時期はおおまかに「描く」「作る」「共同制作」に大別され、前二者はそれぞれ3～4の小課題に分かれる。そしてそれぞれについて各担当教員が具体的内容を決めるかたちだ。70年代は「共通ガイダンス」と呼ばれたように、各ジャンルの基礎技術的な課題が多かったが、80年代以降は思考や発想方法が問われるものが増えてくる。注目すべきは、まだ空きの多いキャンパス空間の特質を活かした大掛かりな課題である。例えば1985（昭和60）年の「作る II」（5月7日～18日）は「自動車を解体し、別な新しい造形物として再構築する」というものだ。新入生全員が7～8名ずつ16のグループに分かれ、驚くべきことに各グループ毎に

課題「作る II」1985年

課題「描く I〈水〉」1987年

解体対象となる自動車1台が支給される。成果もただ分解してアッサンブラージュしたものだけでなく、キャンパスの広がりを背景にして、真っ二つに裁断する、立てる、埋めるといったダイナミックな展開が見られる。現代の究極の機能物といえる自動車とその部品の日常的な見方をくつがえして造形物に変換する興味深い内容である。

アーカイブ作業を通して、キャンパス環境をモチーフ豊かで多様な表現を許容する芸術教育のインフラとして維持することの重要性をあらためて痛感する。80年代はまだ池が今のように柵で囲われておらず、人と池の水面がもっと近い関係にあった。1987（昭和62）年の第1課題「描く」では、学生たちが岸辺に座って水面を写生しているさまが見られる。その広い水面の描写から水のイメージを自由に展開するのである。池は人工ではなく湧き水による自然池であり、この土地の原地形の名残である。京都芸大が自らの教育理念を「アクア ＠KCUA＝AQUA（水）としての芸術」と見なすようになるのは、この20年後のことである。移転を控え、今さらながらこの沓掛の地の豊かさに気づく。

（井上明彦）

うつしから読み取る技術的アーカイブ

ギャラリートークの様子

本研究は、明治13年（1880）に京都府画学校が開学して以来、約140年にわたって続くうつしの技術や関連資料のアーカイブを行うことで、本学の貴重な記憶として継承していくことを目的としている。また、オリジナルに対するコピーという二項対立的な関係から離れ、うつしそれ自体について、芸術大学らしい創造的な観点から技術・学術・文化などから総合して捉え直すことを目指している。

これまで本研究では、本学日本画専攻で模写を指導した入江波光が従事した法隆寺金堂壁画模写事業に関する記録や、立命館大学アート・リサーチセンターの協力を得て本学芸術資料館が所蔵する模本資料のデジタルアーカイブなどに取り組んできた。

本年度はこのような研究活動の成果を踏まえ、本学芸術資料館と合同で第5期収蔵品展「模写を読む―画家は何を写してきたのか―」を開催した。本展は令和元年（2019）10月26日から12月1日まで本学芸術資料館陳列室で開かれ、11月26日には企画を担当した美術学部教授の田島達也と日本画専攻博士（後期）課程/美術学部非常勤講師の小林玉雨によるギャラリートークが行われた。

本学芸術資料館には、江戸から平成にかけて制作された2,000点に及ぶうつし（模本資料）が収蔵されている。出展作品は文化財の保存修復事業の原点として最も有名な法隆寺金堂壁画模写事業以前に制作されたものを多く採用した。金堂壁画模写事業以前のうつしのコレクションは、近世京都画壇に起源をもつ本学ならではの貴重なものである。本展ではうつしの時代性に着目し、一点一点の分析に留まらず、傾向から全体像を把握し、その差異を展示により可視化することを試みた。うつしは変わらないものの代表のようにみえるが実際には極めて歴史的な産物であり、その差異は時代性だけでなく、何を写すのかという目的意識と、どのように写すのかという技術の選択により生まれるといえる。収蔵品を具体例に、本学におけるうつしの歴史的な変遷を読むことで、学内外にその存在を示す貴重な機会となった。

また、本年度の研究成果として、第5期収蔵品展「模写を読む―画家は何を写してきたのか―」の展覧会図録を発刊した。詳細については図録を参照されたい。

（小林玉雨）

奥行きの感覚のアーカイブ

本研究は、本学のテーマ演習において2012年度に立ち上げられた授業を土台とし（12年度「モデリング」、13年度以降「奥行きの感覚」と改題）、16年度に「『奥行きの感覚』を求めて―新しい奥行き知覚から導かれる新共通感覚の構築」という課題名で科学研究費を獲得している。これまでの研究では、古今東西のさまざまな美術作品の中から、可能な限り偏りのないように、その都度、参加者間の協議によって対象とする作品（作家）を選び、その造形の仕組みに焦点をあてて検証を行ってきた。近年では縄文土器、洞窟絵画、マティスのカットアウト作品などの様々な時代、

天龍寺庭園

ジャンルの作品を研究対象とし、実見と考察に加えその仕組みを読み解くための制作課題を行い検証するという手法で研究を行ってきている（概要については、『京都市立芸術大学美術学部研究紀要』第61～63号に掲載）。

今年度は、科学研究費申請の際に設定した研究期間の最終年度を翌年に迎えるにあたり、テーマ演習を活用した具体的な研究活動の最終年度と位置づけ、これまで取りこぼされてきた内容に焦点をあてると共に再検証が必要となる課題について取り組んだ。また継続的に調査を行っている縄文土器の造形について、長野県の複数施設にある特徴的な土器群を実見し検証を行った。

まず、これまで取りこぼされてきた内容としては、美術作品の内に奥行きの感覚を見つけ出す視点から離れ、現実空間を造形することで現れる奥行きとして「日本庭園」を検証対象とした。この課題では、実際に天龍寺の庭園に赴きその空間を体験することから始め、そこに現れる空間と作庭の関係をいくつかの造形課題を行うことで検証した。また再検証の必要な課題としては、改めてジャコメッティのモデリングについて扱い、ジャコメッティ作品に見ることができる対象との距離を生み出すモデリングについて、実際に粘土により塑像制作を行うことで塑像作品が対象までの距離を生み出す仕組みについて検証を行った。この課題でも参加者の実見を重視するために豊田市美術館の協力のもと、特別に鑑賞の機会を作っていただき、ジャコメッティ本人が見たであろう距離と光線を再現し、そこに

日本庭園課題制作風景

現れる奥行きの感覚を参加者で共有し検証を行った。縄文土器の調査では、長野県周辺から出土した縄文土器群の造形をある程度まとまってみる機会を作ることができ、この研究当初に調査した新潟県周辺の縄文土器の造形とは全く異なる仕組みを有していることを理解することができた。とはいえ、共通して言えることは、いずれも自然界にある動植物はたまたその現象や成長のサイクルをあくまで3次元のまま抽象化することで、その造形を複雑なものにしているということである。一旦2次元に置き換えるという経験がもとより存在しなかった縄文の人々が造形を行う際に働かせていたであろう空間意識について思いをめぐらすことで、単なる意味としての装飾として扱われてしまいがちである縄文土器の造形を、より豊かなものとして感じることができた（以上の内容については『京都市立芸術大学美術学部研究紀要』第64号に詳細が掲載される予定なので、そちらを参照されたい）。

次年度はいよいよ研究の最終年となり、これまでの研究成果をまとめた展覧会を2020年12月初旬にギャラリー@KCUA（@KCUA 1）

《浅鉢型土器》（国宝）尖石縄文考古館

《釣手式土器》尖石縄文考古館

で開催する予定である。またこの研究の参加者それぞれが各自の立ち位置から個別の考察を行い、それらをまとめた論文集の作成を目指している。この研究のこれまでの広がりがそのようにひとつの形となり、研究当初に目指した通り、奥行きの感覚が自明の評価軸として受け入れられるようになればと思う。

（小島徳朗）

双眼文様のある土器の数々、井戸尻考古館

美術関連資料のアーカイブ構築と活用

本プロジェクトは、次の二つのアーカイブ活動の総称である。一つは、名画の中の人物や著名人に扮する作品で知られる森村泰昌（1951-）の文献資料を対象とする「森村泰昌アーカイブ」（2000年5月～）であり、もう一つは仏教美術、京都の文化、また美術作家の作品や展覧会の記録など幅広く撮影し続けた写真家の井上隆雄（1940-2016）の写真資料を扱う「井上隆雄写真資料に基づいたアーカイブの実践研究」（2017年4月～）となる。

森村泰昌アーカイブでは、今年度は関連資料のうち引き続き新聞記事を中心に整備し、文字データは1999年と2000年、画像は1995年の一部と1998年、1999年、2000年分を入力した。また、芸術資源研究センターにて公開中の森村泰昌関連資料データベースのデータの修正追加を行ない、資料の活用について検討した。

井上隆雄写真資料に基づいたアーカイブの実践研究では、昨年度11月より開始したインド・ラダック仏教壁画の資料群に対する共同

研究に重点的に取り組んだ。井上隆雄の写真資料には、インド・ラダック地方の写真群があり、外国人の入域制限が解かれた1974年頃の仏教壁画群に関する1,000点を超えるポジ類、多数の資料類が残されている。その時の撮影をもとに1978年に駸々堂より出版された井上隆雄『チベット密教壁画』があるが、収録から抜け落ちた資料群も多数あり、また撮影時の取材ノート、メモ類も残されている。今年度は、膨大なポジフィルムを寺院別に分類する作業を終え、デジタル化を進めている。また図像研究として重要とされるアルチチョスコル寺院とサスポール寺院に対しては、寺院内の空間構造に基づいたデータベース構築を進めている。このデータベースの仕様は、少人数でのメンバー構成だからこその意見交換と共有意識によって検討された。このことはアーカイブの恣意性と創造性という点で示唆的であると考えており、ここからアーカイブ実践の方法論や意義について今後も考察していきたい。またアルチチョスコル寺院三層堂の「般若波羅蜜仏母」のデジタル化による細部の観察では、共同研究者の正垣雅子先生により具体的な描写と筆致を確認することができた。当時、ラダックの仏教美術に影響を与えたカシミール地方の様式と称される表現技法を理解することにつながる。成果報告として、2019年6月22、23日に帝京大学で開催された第41回文化財保存修復学会全国大会でポスターセッションによる研究発表を行った。

共同研究と並行し、井上隆雄全資料の内容と点数確認を終え、目録を作成した。井上隆雄が残した作品やフィルムは、現在もなお貸し出しの依頼がある。目録は今後の利活用にとって有効な資料となる。

この二つのアーカイブ活動は、今後も管理・保管している実資料を対象に、データベースの構築とそのプロセスの検証を進め、美術関連資料からの美術・文化史研究への方法論をより多面的に検討していく。

（山下晃平）

現代美術の保存修復／再制作の事例研究——國府理《水中エンジン》再制作プロジェクトのアーカイブ化

シンポジウム「過去の現在の未来2」関連展示　会場風景
撮影：Tomas Svab

國府理（1970～2014、京都市立芸術大学美術研究科 彫刻専攻修了）は、自作した空想の乗り物やクルマを素材に用いた立体作品などを通して、自然とテクノロジー、生態系とエネルギーの循環といった問題を提起してきた美術作家である。福島第一原発事故への批評的応答として発表した《水中エンジン》（2012）は、自作した水槽の中に軽トラックのエンジンを沈め、水中で稼働させる作品である。部品の劣化や漏電、浸水などのトラブルに見舞われた國府は、展示期間中、メンテナンスを施しながら稼働を試み続けた。

國府の創作上においても、「震災後のアート」という位相においても重要な《水中エンジン》だが、発表の2年後に國府が急逝し、使用されたエンジンも廃棄されていたため、展示はほぼ不可能となっていた。だが、キュレーターの遠藤水城氏の企画により、2017年に再制作が行われた（現存するのは「水槽」のみであるため、今回の再制作では「エンジン」部分を対象とし、オリジナルと同じ型番の中古エンジンを使用した）。國府は設計図や稼働マニュアルを残していなかったため、記録写真や映像の調査、関係者へのインタビューなどを参照し、試行錯誤の連続だった。実際の作業は、生前の國府と関わりの深いアーティスト、白石晃一氏が担当した。

再制作作業は、エンジンの型番の調査などの準備期間を経て、2016年12月～2017年4月に1台目の再制作を、6月～7月に2台目の再制作を、京都造形芸術大学のULTRA FACTORYで行った。再制作1台目は、遠藤氏が企画したグループ展「裏声で歌へ」（小山市立車屋美術館、2017年）に出品された後、オリジナルが発表された京都のアートスペース虹での「國府理 水中エンジン redux」展（2017年）の前期で展示された。再制作2台目は、同展の後期にて展示した。

筆者は、この再制作プロジェクトにアーカイブ・記録担当として参加し、2017年11月に兵庫県立美術館にて開催したシンポジウム「過去の現在の未来2 キュレーションとコンサベーション その原理と倫理」の関連展示において、再制作のドキュメントや関連資料（國府による文章、ドローイングの複製、稼働の記録映像など）を展示した。資料展という性格上、オリジナルの水槽と再制作のエンジンを分けて展示したが、真正面から見ると、水を満たした水槽の中にエンジンが浸かっているかのように見える視覚のトリックを仕掛けた。シンポジウムでは、再制作プロジェクトメンバーのほか、保存修復の専門家、美術館学芸員、研究者がレクチャーとディスカッションを行い、現代美術の保存修復や再制作の抱える課題、さらにその肯定的な意義や本質的な問題提起についての議論が交わされた。

この再制作プロジェクトの意義は、極めて多岐に渡る。1）作家／設計図／モノの不在といった何重もの困難を抱えた状況下での再制作であること。2）資料やインタビューの収集によるアーカイブの構築。3）安全性を最優先に考慮した再制作 2 台とオリジナルとの「差異」の比較検討から、オリジナルの本質が逆照射されること。4）動態的な作品における「同一性」の問題（物理的同一性／コンセプトのどちらのレベルに重きを置くのか）、「再制作」と言いうる根拠や倫理性、パーツを交換しながら新陳代謝的に生き延びる作品の「保存」のあり方など、「再制作」「保存修復」をめぐる広範な問いの喚起。

現代美術、特にメディア・アート作品や、非永続的な素材を使用した作品、一過性のインスタレーションやパフォーマンス作品をどう保存すべき／できないのかは、国内外の美術館における火急の課題である。本プロジェクトでは、再制作の記録、関連トークやシンポジウムの採録、再制作プロジェクトメンバーによる論考などをまとめた書籍の出版に向けて準備を進めている。

（高嶋 慈）

京都美術の歴史学—京都芸大の1950年代 —

本プロジェクトは、京都という立地のもつ歴史的背景、なかでも本学の教育カリキュラムとの関連から、戦後の美術やデザインの展開とその意義を紐解いていこうという試みである。「京都美術」と、敢えて限定的な設定にしてあるのは、作家の活動や作品受容にとって、その土地の歴史性や諸条件が重要だと考えるからである。国家単位の美術史記述では漏れ落ちてしまいがちな、こうした「場」に根差した諸要素を汲み上げる研究を、とりわけ新たな美術理念の実験場として機能した本学のカリキュラムへの着目をベースに行っていくことが本プロジェクトの主眼である。またこの方法が、ひいては本学に眠る有形無形の芸術資源の掘り起こしと、それに基づく研究の進展につながることを期待している。

本学の歴史を紐解くとき、その転換点の一つとなるのが、制度的に大学に転換し、新しい教育改革のもと前衛美術の土壌が築かれることとなった1950年である。一方で、当時は第二次世界大戦の敗戦による占領期（1945-52）にあたる。とりわけ京都は西日本最大の米軍駐屯地であり、この教育改革が複雑な状況下ですすめられたことは重要である。美術史の中でも、終戦から占領期における美術家の活動は長らく空白期とされてきた。2000年以降、東京では作家への聞き取りを端緒に実証研究が進んできたが、[1] 関西ではこうした方向性の研究は端緒についたところである。一方で京都に関する都市史・社会史の分野では、立命館大学などを中心に占領期研究が進んできたが、[2] 情報交換をできる場はいまだ少

ない。他分野の研究者、当時を知る本学卒業生を交えて研究会を行い、終戦後〜50年代にかけて、京都芸大および関係する美術家がおかれていた状況を包括的に明らかにすることは、本プロジェクトの大きな目標である。

こうしたテーマ設定と目標のもと、現在のところ具体的なケーススタディの主軸が2つ設定されている。ひとつは、彫刻科における教育改革の解明である。辻晋堂、堀内正和が進めた立体制作のカリキュラム（1953-74）は、大学として抽象というモダニズム概念をいち早く評価し、教育に取り入れた独自のものであった。辻、堀内の往復書簡（1930-50年代）を中心とする資料分析、卒業生への聞き取りといった具体的な調査をもとに、カリキュラム構築の背景とその教育の実態を明らかにする。この部分は、神奈川県立近代美術館学芸員の菊川亜騎が担当し、プロジェクトの初年度から研究成果を公開してきた。[❖3]

もうひとつの軸は、上野リチを中心とする本学のデザイン教育に関する研究である。上野リチは、ウィーン工房で活躍したデザイナーであり、上野伊三郎との結婚をきっかけに来日。その後、本学でも教鞭をとることになった。しかし、上野リチの教育者としての活動の全貌や、その背景をなす諸活動については、いまだ研究の余地が大いにある状況である。日本の意匠・デザインに対する国際的な期待の地平と戦後の実状の大きな隔たり、あるいは産業界からの要請とデザインの内容の関係性など、追求すべき論点は数多く存在する。このテーマについては、戦後京都のテキスタイル・プリント・デザインの研究を行ってきた牧田久美が担当する。[❖4]『COMPOST』創刊号となる本号にも、今年度の調査報告が掲載されるため、そちらもご参照頂きたい。

このように、本プロジェクトの主軸は、彫刻（美術）とテキスタイル・デザインという異なる領域から構成されている。しかしこれらのテーマを、カリキュラムの改変等に見られる方法論への意識、あるいは新たなデザイン観やモダニズムの受容といった共通の観点から研究していくことで、近代から現代への架橋となるこの重要な時期に対する認識は著しく深まりうると思われる。また、卒業生や関連作家への聞き取り調査など、オーラルヒストリーの手法を活用することで、本研究はさらに実質的で意義あるものとなるであろう。聴取等でご助力いただく機会もあるかもしれないが、その際には是非、貴重なご助力を賜れれば幸甚である。

（深谷訓子・菊川亜騎）

❖1　五十殿利治「CIE図書館と占領下の美術界」『藝叢』（筑波大学）第29号、2014年、1-17頁；『戦後の日本における芸術とテクノロジー』松本透代表、科研費研究成果報告書、東京国立近代美術館、2006年など。
❖2　西川祐子『古都の占領：生活史からみる京都 1945–1952』平凡社、2017年。中部大学編『占領期京都を考える』（『アリーナ＝Arena』第15号別冊）風媒社、2013年など。
❖3　菊川亜騎「関西日仏学館と京都の美術家—第二次世界大戦期の交流について—」『研究紀要』（京都市立芸術大学美術学部）第63号、2019年、49–56頁。
❖4　例えば戦後京都という環境や時代背景とデザインとの関係性については以下を参照。牧田久美「戦後日本繊維産業復興期におけるGHQのデザイン育成政策：絹輸出貿易における販売促進企画を中心に」『デザイン理論』（意匠学会）第70号、2017年、63–77頁。

崇仁小学校をわすれないためにセンター

本プロジェクトは、2023年の京都芸大崇仁地区への移転に向け、2020年度中の解体が予定されている崇仁小学校（2010年に閉校）に関する、記録（資料）と記憶の継承、ならびにその創造的な再活性化を目的として行っている。

崇仁地区は現在大きな転換期にある。今後の崇仁地区の担い手には、地域住民だけでなく、芸大の学生や教職員、芸術に関心をもつ多様な人びとがふくまれるはずである。したがってここで重要なのは、記録と記憶を、何らかの閉じたアイデンティティの礎としてのみ継承することではなく、地域の歴史にかかわる（やや）開かれた文化的・空間的・人的な資源として、創造的な感覚とともに感じとることであろう。あるいはその逆に、この場で行われていく創造的活動を、地域あるいは環境がもつ多様なレイヤーへと埋め返し、新たな記録と記憶の土壌にしていくことであろう。

記録と記憶の創造的な再活性化とは、このような、開かれた土壌としての地域資源の読み替え、あるいは転換可能性の拡張を企図するものだ。本プロジェクトが特に小学校に焦点をあてる理由も、学校という空間が、地域に深く根づきながら、同時に常に開かれたものであることにある。

こうした観点から今年度は、①崇仁小学校に保管・継承されてきた資料の調査と、②崇仁小学校校舎を使った資料展示を行う予定である（会期：2020年3月20日〜31日、会場：崇仁小学校）。なお後述するように、崇仁小学校に関連する資料群は、体系的な整理が完了しているわけではなく、分散的に管理された状態にある。そのため、そもそも資料に「触れる」ためには、地域の人びとや資料を継承してきた団体・機関との信頼関係が必要である。本プロジェクトでは、地域の夏祭りや運動会などに参加して交流を深め、また研究の目的や内容を随時地域の団体や個々の方々に説明しつつ、活動をすすめている。

調査・活動結果について簡単に述べる。崇仁小学校に関する資料は、1）京都府立京都学・歴彩館、2）京都市学校歴史博物館、3）柳原銀行記念資料館、4）その他に、保管ないし一時的に継承されており、校舎内にもまだ一部残されていることが明らかとなった。1）は主に柳原小学校に関係する行政文書、2）は主に昭和初期の学籍簿や未整理資料、3）は主に山内政夫氏（柳原銀行記念資料館事務局長）らが整理・調査をつづけてきた資料群である。

年度末の崇仁小学校校舎における展示資料では、小学校を軸とした地域の記憶に関して特に重要だと思われる、3）の資料群を活用する。そこには、時々の教員の考えを記した文書、生徒や教員の写真、増築や改築を重ねた学校校舎の詳細な設計図、遠足やイベントのしおりなど、長い歴史をくぐりぬけながらこの地で行われてきた教育の足跡を思わせる資料が数多くふくまれている。これら資料の展示においては、柳原銀行記念資料館の山内氏、アーティストの伊達伸明氏、新キャンパス設計・リサーチチームの大西麻貴氏・榊原充大氏らと協力しつつ、資料整理と準備を進めた（この展示の詳細については、次年度別途報告書を作成する予定である）。

今後はひきつづき資料の整理をつづけるが、課題となるのは、変貌の渦中にある地域がどのようにその地域に関する記録と資料を継承する母体をつくり、記録と記憶の継承方法を編み出しうるかであろう。それはいいかえれば、ある記録・資料が、どのようにして「共有資源」となりうるかという問題でもある。

地域の人びとだけでなく、その場に新たに関わる人たちが、どのようにして「資料あるいは記憶の共有者」に、その資料を用いた、新たな「歴史の創造者」になりうるのか？ 大文字の歴史をめぐって行われてきた記録と記憶の簒奪をめぐる暴力を、あらためてここでくりかえすことなく、しかし誰かによって強制されるのではないかたちで記録と記憶をうけつぐにはどうすればよいのか？　そのための方法を発見する、あるいはつくりだすことが、今後の課題である。

（佐藤知久）

バシェの音響彫刻プロジェクト

プロジェクトの目的

バシェの音響彫刻は、ベルナール・バシェ（1917-2015）、フランソワ・バシェ（1920-2014）兄弟によって1950年代に考案された、音の鳴るオブジェである。1970年大阪万博の鉄鋼館の音楽監督であった武満徹氏から、音響彫刻の製作と展示を依頼されたフランソワ・バシェは、来日して17基の音響彫刻を作った。バシェの作品は様々な国に遺されているが、これほどまでに数多くの大型音響彫刻が一度に作られたのは、後にも先にもこのEXPO’70をおいてほか例を見ない。しかし

万博閉幕後、鉄鋼館は封鎖、音響彫刻はすべて解体され、倉庫に保管されたまま世の中から忘れられていった。

2010年鉄鋼館が「EXPO’70パビリオン」として再びオープンしたことが、バシェの音響彫刻を永い眠りから解くことになる。オープンに際して、まず「池田フォーン」が、そして2013年には「川上フォーン」と「高木フォーン」が修復・復元された。それから2年後の2015年に「桂フォーン」と「渡辺フォーン」が、本学彫刻棟において修復されたことが、私がバシェの音響彫刻に興味を抱くきっかけとなった。さらに2017年には東京藝大において「勝原フォーン」が修復され、日本で音の出せる状態に復元されたバシェの音響彫刻は6基になった。

1970年大阪万博鉄鋼館におけるバシェの音響彫刻の展示風景

以上述べた音響彫刻群は、今年50歳を迎えたことになる。当然、錆びたりゆがんだり、ネジ山が甘くなったりして、メンテナンスを施す必要性が明らかになってきた。またバシェ自身による綿密な設計図が残されていないので、構造の詳細、音響の記録などアーカイブを残す必要性も感じている。

2020年は1970年大阪万博から50周年というメモリアルイヤーで、東京、神奈川、大阪、京都とバシェの音響彫刻が大移動しながら、それを用いたコンサートやワークショップを伴う展示が開催される予定である。2019年4月からスタートした本プロジェクトは、主にその2020年の準備期間として活動した。以下、活動項目に分けて報告する。

2019年度の活動報告

1. メンテナンス

2015年10月以来本学大学会館ホワイエに展示してある桂フォーンと渡辺フォーンは、コーン（拡声盤）に白錆びが発生したり、演奏のために貼り付けられたテープ跡が多く見受けられたりした。そこで、プロジェクトチームメンバーが2週間に1度ぐらい集まり、錆び取り剤や金属磨きで清浄作業を行なった。

メンテナンス作業

2. 録音

10月に二通りの録音を行なった。一つは桂フォーン、渡辺フォーンに、「冬の花」（2015年に音響彫刻の修復指導をするために来日したマルティ・ルイツ氏と、本学彫刻専攻学生との協働によって作られた小型のバシェ・モデル）と、パレット・ソノール（バシェの教育音具）を加え、また時にはヴォーカリストも共演して、即興的に演奏した音楽の収録である。

もう一つはアーカイブとしての録音である。バシェの音響彫刻の音は通常の楽器の音とは違い、複数の倍音が同時に聞こえたり、打つ物によってピッチが異なったりする。今後それらについての音響学的研究の資料になることも踏まえて収録した。

3. 国際交流

10月、メキシコ人のバシェ研究者イヴァン・ナヴァレット氏が来日した。大阪のEXPO’70パビリオン内の音響彫刻3基を試奏できるよう手配し、同行した。また本学の音響彫刻2基も試奏してもらった。メキシコにもバシェの音響彫刻作品が遺されており、またパレット・ソノールを用いた音楽教育も実践されているということで、今後ますます交流を深めていきたい。

桂フォーンを試奏するイヴァン・ナヴァレット氏

4. 教育

後期に音響彫刻を用いたゼミと特別授業を行なった。

まず作曲特別演習ゼミでは作曲専攻学部1回生3名と指揮専攻修士1回生1名の計4名で、毎週、大学会館ホワイエで音響彫刻を試奏しながら、奏法や記譜について考えた。その成果は2020年11月にギャラリー@KCUAにて開催予定の「バシェ特別企画展」にて発表される予定である。

また10月末のキャリアデザイン演習（音楽学部全専攻生対象）では、音響彫刻のデモンストレーション演奏のほか、パレット・ソノールも交え、ダンサーにも特別参加してもらって、自分で音を発見する体験と、音を用いたコミュニケーションについての実験的な授業を行なった。

キャリアデザイン演習での授業風景

バシェの音響彫刻のミニチュア版ともいえるパレット・ソノールを用いた教育については、京都子どもの音楽教室との共同研究課題として、さらに経験を積んでいきたい。

（岡田加津子）

原版と銅版画作品のアーカイブ

再制作された銅版画

銅版画作品のアーカイブとして進めた岡崎和郎氏とのプロジェクトは、氏が1967年に発表した「消えたプロフィール」という作品を銅版画で再制作するということになった。この作品は岡崎氏の手元には無く、作品に使用したポジフィルム自体も不明となっており、過去に美術手帖に掲載された写真しか残っていない状態であった。雑誌の写真を何度もコピー機に通し、岡崎氏が作品の原稿を制作し、それを元にどのような方向で銅版画にするのか打ち合わせを行った。原稿を元に10種類ほどの銅版画作品のトライアルを作成

し、その後3種類の案が採用され、赤い色面を使用した作品に呼応する形で青い作品（氏は日本絵画に登場する青鬼の色を指定した）を追加で制作することに決定した。元々の作品はビニール人形の頭部の内側にゼラチンを流し込んで固めたものを、ライトボックス上で水をかけながら溶かしつつ撮影されたもので、作品は光と影・ネガとポジを行き来するような性質を有していたので、銅版画ではポジフィルム制作の際にネガとポジの状態の2種類を写真製版技法を用いて製版した。また刷りの段階でも通常の凹版刷りだけでなく、凸版刷り・凹凸版多色刷りなどのテクニックを組み合わせることで、岡崎氏の手法の一つである「型」の持つ可能性を示唆しようと試みた。再生された作品に加え、原版・原稿・ドキュメントなどをまとめることで単に資料的価値だけでなく、作品を実制作する研究者にとっても実践的な価値のある資料としてまとめることができた。

（大西伸明）

絵具に問う

絵画を彩る絵具は、画家が描いた痕跡であり、絵具から画家の表現の意図、画家がおかれていた状況などを読み解くことができる。保存修復専攻における絵画作品の研究調査では、画面の細部に関する画像や自然科学的な手法によるデータを多く得ている。特に修理に伴った調査では、作品を解体した際に限って得ることができる支持体の裏側のデータなども得られる。これらのデータは絵画の保存や研究をする上で価値のある資料と考えられるが、そのすべてを公開する仕組みがなく、専攻でアーカイブする体制も整っていない状況があった。そこで、本プロジェクトは絵画からより多くを学ぶ環境を整えることを目的とし、保存修復専攻の研究活動によって得られた絵具に関するデータのアーカイブを目指す。

プロジェクトの始動の年度であった本年度は、専攻の教員や学生が行った調査を専攻で把握し、教員や学生が調査データを専攻に提出する仕組みを構築することを目標とし、修士課程の保存科学・修理実習における作品調査、本学芸術資料館の所蔵作品の調査のデータを対象にした。具体的な検討は、川下理恵氏、紀芝蓮氏、棚橋映水氏、高林弘実によるワーキングチームを発足して行った。検討を踏まえ、教員・学生に調査申請書・報告書を提出してもらうことによって専攻が調査の実施を把握し、申請書・報告書を保管することによって調査の記録を残すことにした。申請書・報告書についてはフォーマットを作成することとし、媒体は長期間の保管が簡単な紙とし、記入・管理の便を考え、共にA4・1枚とすることにした。申請書については、調査目的・対象・方法を書き、学生は教員に提出することにした。報告書については、修理の過程で得られるデータについては棚橋氏を中心に、自然科学的調査で得られたデータについては紀氏を中心にフォーマットを検討した。12月に専攻内にデータの提出への協力を依頼し、データを提出してもらった。提出されたデータについて確認を行い、今回の試みで明らかになった今後の課題について川下氏を中心に明らかにした。これを踏まえ、より効率的な運用となるように改善を図る予定である。

（高林弘実）

タイムベーストメディア作品アーカイブにおける鑑賞性の保存・修復・再創造

1. ダムタイプ《p/H》VRシミュレーター

前年度より進めている《p/H》（ダムタイプ）のデジタル・アーカイブを活用した仮想現実（VR）シミュレーターの制作を継続。主に、パフォーマーの動きを書き起こししたデータの修正を行った。

前年度までに、《p/H》に出演していた5人のパフォーマーの動きをモブージュ公演の定点カメラ記録動画から読み解きデジタルに変換したデータを用いてシミュレーターを作成していた。しかしながら、ダムタイプオフィスを交えた再現テストの際、このデジタルデータにいくつかの間違いが確認されていた。本年度は、この間違いを修正することによってより確度の高い、デジタルアーカイブを構築することを目指した。

また、前年度までは、VRシミュレーションのヘッドマウントディスプレイ（HMD）としてHTC VIVEを使用していたが、本年度は、より携行性の高いOculus Questでのシミュレーター実装を実験した。

Oculus Questは、6DoFと呼ばれる技術をもちいており、トラッカーなしで位置と状態の情報取得がおこなえる。また機材自体がAndroidコンピュータを搭載しており、PCとの接続が必要なく、ケーブルレスでシミュレーターのVR視聴が可能となる。つまり、トラッカーの設置も必要なく、Oculus Questさえあれば、どこでもVRシミュレーションの視聴が可能となる。このことは、使用機材やソフトウェアが多様になることによって再生が複雑化することを防ぎ、シミュレーターが保存されたHMDさえきちんとした手続きをもって保管されていれば、将来的にも視聴性が担保されるというように、アーカイビングの観点からもある一定の評価を与えることができると考えた。

2.「搬入プロジェクト」を山口で実施する

山口情報芸術センター［YCAM］の渡邉朋也が主導する『「搬入プロジェクト」を山口で実施する』（国内クリエイター創作支援プログラム採択事業）に参画。

故・危口統之主宰の劇団・悪魔のしるしの代表的な演劇プロジェクトのひとつ「搬入プロジェクト」は、任意の建物にぎりぎり入る物体を制作して、複数人で協力しながら搬入するプロジェクトである。主要な作者が故人となっており、また、作品自体がパブリックドメインとして著作権が放棄されており、誰でもいつでも「搬入プロジェクト」をおこなってよいものとなっている。

本プロジェクトは、この「搬入プロジェクト」を2020年にYCAMで再演することを目指して、日本各地でテストを行い、テストを行いながら、芸術作品のパブリックドメイン化において何が必要となるか、どういったマニュアルやノーテーションが有効かを検証するプロジェクトである。

また、物体設計のためのソフトウェアの開発など、デジタル技術も導入することにより、作品概念の保存におけるデジタル活用の可能性についても模索した。

2019年12月には、本学において実際の「搬入プロジェクト」のテストをおこない、約50名の学生とともに、物体の設計、模型の制作、物体の制作、搬入までの一連の流れを再現した。

（砂山太一）

京都工芸アーカイブ

海外コレクションに所蔵される京焼の調査を継続的に進めてきたが、本年はインド・ハイデラバードのサラール・ジャング博物館の所蔵品調査を行った。インドに3館ある国立博物館のひとつで世界中の美術工芸品が展示されている。ニザーム藩王国に仕えたサラール・ジャング家のサラール・ジャング三世（1889-1949）が収集した美術コレクションが基礎となっている。

今回の調査の結果、収蔵品の中には2000点を超える数の日本の美術工芸品が収蔵されており、明治期の後半から戦前期の京焼が相当数含まれていることを確認できた。東京国立博物館所蔵で1893年に開催されたシカゴ万国博覧会に出品された七代錦光山宗兵衛作《色絵唐草文獅子鈕飾壺》と同型の作品など優品も少なくない。コレクションには陶磁器の他にも、刺繍・金工・牙彫などを含んでいるため、来年度はそれぞれの専門家チームを編成し本格的な調査を予定している。日本の工芸品を積んだ船が必ず寄港したインドであるが、これまで研究対象にはなってこなかった。

作品調査だけではなく、コレクションの歴史や購入のルートなどを調べることにより、京都を含めた日本の美術工芸の広がりを解明することになると期待している。

本年は昨年から継続してきた1994年に開催された「五条坂を知る会」の録音テープ6回分12本の文字起こしを進めた。本テープには五条坂の記録としては極めて貴重な内容を含んでいることが分かってきた。来年度は作業を終えて、内容に関する研究を行い可能な範囲での公開を目指す。

（前﨑信也）

・「美術工芸のリソースに関するアーカイブズの試行」の活動は本編で報告しています。

・お休み中のプロジェクト
「戦後日本美術のオーラル・ヒストリー」
「京都・近代絵画の記憶」
「音楽学部・音楽研究科アナログ演奏記録デジタル・アーカイブ化」
「美術教科書コレクションアーカイブ作成」

アーカイブ研究会

芸術資源研究センターが行う研究会「アーカイブ研究会」では、今年度〈シリーズ：トラウマとアーカイブ〉と題して、連続的な講演と議論の場を設けました。

公的な歴史や大きな物語からこぼれおち、それゆえ忘れ去られていく出来事とその記憶については、その記憶を聞きとり、引きうけ、わがこととして受けつぐ試みが、近年多くの場面で行われています。

今回考えてみたいのは、忘れ去られつつあり、かつ忘れてはならないと思われるにも関わらず、差別や暴力の経験、負の記憶に結びついているために、あるいは今それについて語ることが新たな暴力や差別を引き起こしかねないために、思い出すことや語ること自体が現在でも困難であるような出来事とその記憶―トラウマ的な記憶―についてです。

たとえば、差別の経験や、国と国のあいまにある中間的な場所の記憶などについては、それについて語る・想起する・言及すること自体が、当事者にとってはもちろん、アーティストや研究者にとってもむずかしいという現状があります。しかしながらだからこそ、そうしたことがらについて語り、聞き、話すための場所が必要だとも言えます。

では実際に、こうした経験と記憶については、どのような試みやアプローチが可能でしょうか。本シリーズでは、記憶をアーカイブする装置としての芸術やフィクションの可能性に注目してみます。集団的というよりも個的な記憶、言語的・歴史的史料というよりも、フィクションや視覚的資料、そしてさまざまな「モノ」などに焦点をあてるこうした実践が、いまどのように可能なのか。異なるフィールドを対象に、忘れられるべきではない経験と記憶についての研究や表現活動を実践してこられた方たちをお迎えし、語ること、想起すること、聞きとり・引きうけ・受けつぐことの可能性とその具体案について、考えてみたいと思います。

（佐藤知久）

第25回アーカイブ研究会
シリーズ：トラウマとアーカイブvol.1
・
《シャンデリア》自作を語る
――近代歴史の中で生き残った人々の話から
講師：裵相順｜2019年10月8日

裵相順（ベ・サンスン）氏は、京都市立芸術大学に留学して、抽象画の訓練を受けたが、日本で暮らしつつ、5年ほど前から調査ベースのビデオや写真作品を制作するようになった。彼女が主な調査の対象としてきたのは、戦前の日本人の朝鮮半島への移住と、戦後の引き揚げの経験である。講演の冒頭で、裵氏は、聞き取りをした辻さんの映像を紹介した。辻さんの家族は、1910年の日韓併合の前に韓国中部の都市大田（テジョン）に渡っており、写真好きの父は当時の写真を残していた。ソウルから釜山へは南北に鉄道が走っているが、その中間にある大田駅が開業したのは1905年のことである。この年の前後に日本人の入植者が移住し、日本人村が形成されたのだった。辻さんはその大田で育つが、太平洋戦争後の引き揚げで、関西に戻ってきた。裵氏は、こうした生き残った人々の聞き取りを行いながら、資料を掘り起こし、大きな歴史からこぼれ落ちる個人の記憶を作品にするよう取り組んできた。

過去の記録は、忘却の時間をたどるための最初の手がかりになる。裵氏が調査を始めたとき、まず中学生の時に撮られた家族写真を再現するかのようにして現在の姿を撮影することを試みたという。そうした比較を手がかりに、移住前の韓国と移住先の関西の街へと実際に訪ねてみると、時間の変化が感じられるようになる。彼女が特に注目したのは、植民地時代に日本が作っていた壁の土台だ。「語ることのできない石の変化に、語れないもののイメージがある」という。

10名以上の人々への聞き取りで語られた移住の経験への想いはさまざまだ。戦争中も移住者にとっては楽園のように平和で豊かだった環境を懐かしみ深い愛着を表明する者もいれば、結婚で韓国に移住したものの、日本に戻りたいけど戻れずに苦しんでいる者もいる。そうした調査に対して、もっと痛ましい歴史もあるのになぜ日本人を調べるのかという韓国側の反応もあり、調査の意味をも自問させられたという。それでもなお、自分が日韓を行き来する者だからこそ、これまで移住の経験を語ることが出来なかった人が、信頼して細部まで話すことができたのだと自らに言い聞かせることもあったと、彼女はその葛藤を吐露する。

それゆえ5年の調査のあいだに裵氏にも変化があったという。調査と創作との接点を時間をかけながら飲み込んでいき、展覧会でのアウトプットを進めるなかで、対象を内面化していく体験があったのだ。裵氏はそうした感情の動きを、平行線という抽象的な比喩で説明した。平行線は、鉄道の線路のように、向き合わざるを得ない距離感をもって、つかず離れずにいる。そうした感覚は、戦前の機関車の模型が走るインスタレーション、地図に基づいたドローイング、絡みあった紐などで表現された。そのうち、2004年頃に描いていた画面全体に曲線が重なり合う抽象画の作風が回帰してきたという。韓国と日本の錦糸を使ってシャンデリアのように束ね、解かれない状況を表した抽象的な写真作品が、証言した人々の写真に並置される。「細い細い線で生き残った」人々の気持ちを暗喩するものだと裵氏は説明する。日本と韓国、過去と現在のあいだを往還する人々の感情の交錯には、それを題材にして作品にする作家自身の感情の変化もが複雑に織り込まれているように感じられる。本講演は、そうした主客を超えたトラウマ的葛藤のもつれと変容の過程が語り直される、豊かな言語パフォーマンスにもなっていた。

裵氏は、2019年には、釜山港の船を待つ公園の壁を型取りし、樹脂で作品化した。日本人がつくったこの壁は、その後の大火事によって何度も爆発した跡が残されており、その形が花のようにみえたから、色を染めた。

あわせて公園に残されている木の写真も、反転して花に見立てたという。韓国での植民地化と引き揚げの経験を生きた人々の感情は、その痛みの記憶が複雑に交錯するがゆえにはっきりとは語られずにきた。石に投影された咲き散る花のイメージは、その記憶の痕跡を無言のうちに匂わせるものとなるだろう。

（石谷治寛）

第26回アーカイブ研究会
シリーズ：トラウマとアーカイブvol.2
・
parallax（視差）
――「向こう側」から日本を見る
講師：高嶋 慈｜2019年10月24日

「ナショナルな大文字の歴史からこぼれ落ちる、語られにくい記憶」に対して、アートはどのようにアプローチできるのか？　高嶋慈氏（美術批評家／芸術資源研究センター研究員）は問いをこう設定する。

なぜ語られにくいのか？　大文字の歴史にはそぐわない「負の遺産」、あるいはあまりに個人的で周縁的な記憶だから。では、忘れてもいいのか？　もちろん否である。ではどうするか？　高嶋氏は、リサーチや対話を通じて氏自身が共同作業を行なってきた二人のアーティストの作品を紹介しながら、アートがこの問いにどう応えうるのか、その道筋を探る。

最初に、大坪晶氏の《Shadow in the House》（2017〜）が紹介された。占領期（1945- 52）にGHQ（連合国軍最高司令官総司令部）によって接収され、京都や神戸などに今も残る個人住宅の、現在の様子を撮影した写真作品シリーズだ。この作品では、単に現状を記録するのではなく、室内にダンサーを配置し、そのダンサーのシルエットや動いた跡を、長時間露光撮影によってかすかな「影」のようにそこに写し込むという、フィクショナルな要素がつけ加えられる。

一方、裵相順（ベ・サンスン）氏は、韓国の大田と釜山という都市の歴史と記憶に着目する（前回のアーカイブ研究会報告を参照）。高嶋氏は裵氏とともに両都市を現地調査し、大田の一角にある蘇堤洞（ソジェドン）に、現在でも植民地期日本人街の家並みが残り、今でも住宅として利用されている家があることを「発見」する。けれどもそこでは、今まさに再開発が進み、家々は破壊あるいは洒落た店へとリノベーションされ、忘却と、想起への抑圧とが同時進行していたという。

二人のアーティストが関わる出来事はどちらも、国家にとっては周縁的なhistoryである。かつて自分たちを占領／支配した人々がつくった家や町の上に、現代の自分たちが住むといった経験を、その後の「独立」や「発展」といったstoryに位置付けることは困難である。こうして複雑な経緯は消去され、一方的な物語におきかえられ、過去の痕跡は消去されていく。

では、アートはどうか。

高嶋氏はまず、大坪氏におけるフィクショナルに追加された曖昧な影に注目する。これは誰のシルエットなのか？　接収前に住んでいた住人？　一時期そこに住んだGHQの将校やその家族？　返還後の住人？　複数の解釈が可能だが高嶋氏はそこに「複数の記憶が多重露光的に重なり合い、判別不可能になったもの」「もはや明確な像を結ぶことのできない記憶」を見ることができると指摘する。

釜山の龍頭山公園に残る石垣を型取りした裵氏の《Stone Rose》（2019）も同様である。石にも花にも見えるこの立体作品は、硬いものと有機的なもの、死んだものと生きているもの、傷跡と美といった、矛盾する要素をひとつの物質に共在させており、それによってこの作品は、現実のなかにある語りにくさやレイヤーの複数性を「許容する器」たりえている、と高嶋氏は言う。

歴史記述は、（記述者がマジョリティであってもマイノリティであっても）立場によってどうしても一面的になりがちである。これに対してアートは、複数の視点からの見方を、ひとつの作品に同時に内在させることができる。それによって作品は、現在と過去が断絶しておらずむしろ共存していること、現在の状況の複雑さの根がどこにあるのかを示すことができるのだ。こうしてアートは、別の視点から歴史的出来事に接近するための経路に、困難な想起へと向けられた可能性をひらくのである。

（佐藤知久）

第27回アーカイブ研究会
シリーズ：トラウマとアーカイブvol.3
・
このまえのドクメンタって結局なんだったのか?!
講師：石谷治寛｜2019年12月17日

2019年度のあいちトリエンナーレは、ドクメンタを参考にしたと言われている。ではドクメンタとは一体何なのか。2017年のドクメンタ14を中心に、石谷治寛氏（芸術資源研究センター研究員）が語った。

石谷氏の語りは、「オデュッセイアと移民」「ドクメンタの歴史のなかで」「トラウマとアーカイブ」「都市と暴力の可視化」「ファブリック工場から芸術大学へ」「トロイアの女たち」という6つの部分から構成されている。各テーマに沿って石谷氏は、具体的な作品を詳細に紹介しながら、ドクメンタとは何かについて二時間にわたって語った。作品のもつ具体性と、その作品がドクメンタに展示される意義についての思想的背景を交差させながら進む氏の語りは、提示される情報量の多さと合わせ、文字通りめくるめくものであった。

けれども、ここで石谷氏の話の内容を「要約する」ことは、およそ不可能である。

もちろん、ヨーロッパにおける過去の出来事を多面的な視点――カッセル／ドイツと、アテネ／ギリシャという二つの具体的な視点――から読み直していくこと、その際には複数の視点を交差させていく「アーカイブ的」な仕種をも用いること……といった「特徴」をドクメンタから抽出し、整理し、図式化することは不可能ではないだろう。

個別具体的な問題、とりわけ、ナチスによる「退廃芸術」の弾圧とその掘り返しとしての「グルリットの遺産」問題や、世界各地で今も見られる検閲と焚書、国境や文化や宗教の壁を越えて移動する人間、宗教改革と宗教戦争、戦争と武器商人と美術、産業と大学、警察と都市、都市の中に建築物として残るさまざまな痕跡、記憶と記録、真実と虚構、そして移民危機と排外主義などの現在的課題等々、ドクメンタ14で参照された諸問題の社会的文化的な背景と、その作品への反映について、厳密かつアカデミックに論じることも、不可能ではないはずだ。

あるいはもう一段抽象的なレベルから、たとえば石谷氏が言及した資料 'The Exhibition as Medium and Plot' (Siebenhaar, K. 2017. *documenta.: A brief history of an exhibition and its contexts.* B&S Siebenhaar verlag.) をもとに語ることも可能だろう。それによればドクメンタにおいて、展示空間は「芸術作品のショールーム」としてのみではなく、「思考のための、エステティック／ソーシャルな経験のための、出来事が生じるための空間」として想定されている。キュレーターは展示の「作者」であり「研究者」であるだけでなく、展示空間の「作曲者」「舞台美術家」「コレオグラファー」である。そしてドクメンタは、解読されるべきテキストであると同時に、何かと何かを媒介するメディウム、そこから何かが（アーティストだけでなく、作品の鑑賞者や、議論の参加者によっても）演じられるべきスコア（譜）、つまり、完結した何かではなく、進行していくプロセスとなる。そのようなものとしての〈展示〉の可能性を、現在と歴史を背景に探究すること――それがドクメンタなのだと、そう結論めかして語ることもできなくはないだろう。

だが石谷氏があえてこうした語り口をとらず、いくつかの注意点を際立たせつつも、つねに個々のアーティストと作品、および作品が置かれた場のそれぞれについて論じることに回帰しながら、いわばもういちどドクメン

タを再演するかのように語った点に、ここでは注意しておきたい。そこには、ドクメンタとは何かを明示することではなく、むしろ「ドクメンタから学ぶ」こと、ドクメンタをスコアとしてつぎの行為へと進むことが重要なのだ、というメッセージが含まれているように思える。そしてそれこそ、「ドクメンタってなんだったのか」という問いへの、正確な反応ではないだろうか。

（佐藤知久）

第28回アーカイブ研究会
シリーズ：トラウマとアーカイブvol.4
・
ロマの進行形アーカイブとしての ちぐはぐな住居
講師：岩谷彩子｜2020年2月18日

岩谷彩子氏（京都大学大学院人間・環境学研究科准教授）は、人類学の視点で調査研究を行い、インド移動民の夢の語りや、ヨーロッパでジプシーと呼ばれるロマの人々の文化を考察してきた。岩谷氏が調査対象とするのは、ルーマニアに住む金属加工に携わってきたロマの人々が建てる豪奢な建物である。これらは「ロマ御殿」とも呼ばれ、写真集も出版されている。岩谷氏は、この独特の建物は、記憶の反復や持続に基づく民俗学や伝統の産物というより、安定性のない「進行形アーカイブ」だと述べる。どういうことか？

岩谷氏は、その学術的背景として、近年の記憶研究を整理する。1990年代頃から「集合的記憶」（アルヴァックス）や「記憶の場」（ノラ）といった共同体の記憶を通して歴史を再構築する議論が活発になってきたが、他方で、想起に抗う記憶、共同忘却によって立ち上がる共同性といったトラウマ記憶への着目もあった。そのとき、番号化して分離・管理の道具とするアーカイブではなく、喪の作業としてアーカイブを捉える試みもなされた。たとえば美術家ボルタンスキーのような個々の遺物に名前を与え不在を共有するアーカイブ・アートや焼け焦げた跡など資料の物質性に注目する「不完全なアーカイブ」などである。岩谷氏は、ロマの家屋の様式のもつ象徴論的分析を超えた、そこを人が生きるプロセスに注目し、それを「進行形アーカイブ」としてロマの建築物の考察を続けている。それは身体と物質との関わりの中で立ち現れる環境でもあり、衣服の延長のように外部に開かれた建築であり、記憶が内面から外面へと折り広げられる場所だろう。

そもそもロマは、遊動性の高い移動生活を送るがゆえに、記録や民俗的な起源については無関心で、死に対する忌避の傾向も強いと考えられる。死者を歪めてしまうことへの恐れから、遺物を残すことへのこだわりも低く、長年の構造化された差別の経験から、対抗記憶を表明する人権運動もさほど活発にはなっていない。ルーマニアでは1864年の奴隷制度からの解放後にもロマへの差別は続き、ナチスドイツの占領後には反社会的な存在として強制収容された。戦後にロマの人々は、メタルとスクラップを売る仕事に従事し、工業化のなか蓄財をなす人々も増えた。1990年代以降に、西ヨーロッパに移住して出稼ぎをし、戦後の賠償金がなされるようになって、家を建てるというトレンドが起き、とりわけルーマニア南部の街ストレハイアでは御殿が次々と建てられるようになったのだという。

岩谷氏は調査で訪れた部屋の写真を見せながら、その目を惹く折衷的な様式からなる外観（ロマのインド起源説にもつながるアジア建築の様式やボリウッド映画スタイルの大邸宅とルーマニアの新古典主義やフォーク建築の折衷）、それと対照的な空っぽの部屋（2階には誰も住まず、死者の遺物だけで満たされたり、孫のためのぬいぐるみだけが置かれたりし、大家族の客人が泊まる部屋として使われる）や、ファサードだけ設えられ建設途中で放置された建物などを紹介した。そうした開かれた家の住人の聞き取りから明らかになるのは、強制連行を逃れる途上の迫害や飢餓を生き延びながら、わずかな持参材を生き延びる糧にした経験である。

とりわけ74歳の男性のトランスニストリアでの経験の証言は不思議な夢のようで象徴的だ。彼は警察に追い立てられ馬を奪われ地下に２年間住まわされた。そこから退去させられて帰還後は、金を飲み込んで隠して持ち運び、後に便にして体外に排出することでその財を守って生き延びたという。そして近年の金の価格の高騰や賠償金によって、家が建ったのだ。移住と定住の狭間で、金が文字通り身体の内外を出入りすることで、死と生の価値が反転するような経験を、この家と人は記憶しつつも未来の忘却へと開け放っている。人類学者もまた、そのファサードの内側や証言者の内部に踏み込みながらも、その「進行形アーカイブ」を外へとつなげるメディエーターとなる。岩谷氏は、連続した記憶を持たない民は、家を残すのではなく、「エスカルゴのように脱ぎ捨てていく」、「そうしなければ生きていけなかった」という。

講演には、崇仁地区の街の記憶に取り組む人々の参加もあり、記憶の向き合い方についての類縁性も語られた。苦しい思い出を言いづらいと逆に、見栄を張って内部の人間に対して見せびらかす文化が生じるという。そうした内面は、外部の人間が調査に立ち入ることで、より複雑な表情を見せるだろう。聞き取りをして記録に残し、その記憶を内外で分かち合うことの意義があらためて確認された。

（石谷治寛）

芸資研・よりあいのまとめ

アーカイブ研究会

1. 写真とアーカイブ　旅行写真、鉄道写真を例として
佐藤守弘（京都精華大学デザイン学部教授）
2014年6月25日

2. それってテクノロジーと何の関係があるの？
バーバラ・ロンドン（キュレーター）
2014年8月2日

3. 記憶／記録／価値　ミュージアムとアーカイブの狭間で
平芳幸浩（京都工芸繊維大学美術工芸資料館准教授）
2014年9月30日

4. ダイアグラムと発見の論理　アーカイヴに眠る『思考のイメージ』
田中 純（東京大学大学院総合文化研究科教授）
2014年10月31日

5. アーティストはいつしか作品を作るのをやめ、資料を作り始めている
田中功起（アーティスト）
2014年12月8日

6. チェルノブイリ・ダークツーリズムの実践から
東 浩紀（思想家、作家）
2014年12月17日

7. 映画『ASAHIZA 人間は、どこへ行く』上映＋トーク
藤井 光（映画監督、美術家）
2015年1月19日

8. 唯一のひとつを集積すること
笠原恵実子（作家）
2015年4月24日

9. 文化の領野と作品の領野　アーティファクトとしての視覚文化
石岡良治（批評家）
2015年10月23日

10. 映像民族誌とアーカイヴの可能性　記録映画『スカラ＝ニスカラ バリの音と陶酔の共鳴』上映+レクチャー」
春日 聡（美術家、映像・音響作家、映像人類学研究者）
2015年12月8日

11. 歴史をかきまわすアーカイブ
黒ダライ児（戦後日本前衛美術研究家）
2016年1月18日

12. 不完全なアーカイブは未来のプロジェクトを準備する
奥村雄樹（アーティスト、翻訳家）
2016年2月23日

13. インターローカルなアーカイブの可能性
川俣 正（美術家）
2016年7月22日

14. ものが要請するとき加速する
木村友紀（美術家）
2016年10月27日

15. アール・ブラウン音楽財団—理念、記録、プロジェクトとアクティビティー
トーマス・フィヒター（アール・ブラウン音楽財団ディレクター）
2016年11月30日

16. IT IS DIFFICULT
アルフレッド・ジャー（アーティスト、建築家、映像作家）
2017年4月25日

17. エイズ・ポスター・プロジェクトを振り返る
小山田 徹（美術学部教授）、佐藤知久（芸術資源研究センター准教授）、ブブ・ド・ラ・マドレーヌ（美術家）
2017 年5月17日

18. 5叉路
前田岳究（アーティスト）
2017年6月21日

19. 1960～70年代に見られる芸術表現の研究拠点形成と資料アーカイブの構築
伊村靖子（情報科学芸術大学院大学講師、国立新美術館客員研究員）
2017年12月9日

20. Week End / End Game:展覧会の制作過程とその背景の思考について
田村友一郎（アーティスト）、服部浩之（キュレーター）
2018年1月11日

21. コミュニティ・アーカイブをつくろう！ せんだいメディアテーク「3がつ11にちをわすれないためにセンター」奮闘記
甲斐賢治（せんだいメディアテーク アーティスティック・ディレクター）、北野 央（公益財団法人仙台市市民文化事業団主事）、佐藤知久
2018年9月28日

22. NETTING AIR FROM THE LOW LAND 空を編む—低い土地から
渡部睦子（アーティスト）
ライブ・パフォーマンス｜ MAMIUMU
2018年10月4日

23. 日本の録音史（1860年代～1920年代）
細川周平（国際日本文化研究センター教授）、古川綾子（国際日本文化研究センター助教）
2018年10月11日

24. 特集展示「鈴木昭男 音と場の探究」をめぐって
奥村一郎（和歌山県立近代美術館学芸員）、鈴木昭男（サウンド・アーティスト）
2018年12月16日

25. シリーズ：トラウマとアーカイブ vol.1｜《シャンデリア》自作を語る—近代歴史の中で生き残った人々の話から
裵 相順 Bae SangSun（美術作家）
2019年10月8日

26. シリーズ：トラウマとアーカイブ vol.2｜parallax（視差）—「向こう側」から日本を見る
高嶋 慈（芸術資源研究センター非常勤研究員）
2019年10月24日

27. シリーズ：トラウマとアーカイブ vol.3｜このまえのドクメンタって結局なんだったのか?!
石谷治寛（芸術資源研究センター非常勤研究員）
2019年12月17日

28. シリーズ：トラウマとアーカイブ vol.4｜ロマの進行形アーカイブとしてのちぐはぐな住居
岩谷彩子（京都大学大学院人間・環境学研究科准教授）
2020年2月18日

特別授業

1. 横盗り物語／ヨコハマトリエンナーレに託すもの
森村泰昌（美術家）
2014年7月7日

2. [読めるものと読めないもの 2] Artist Bookをつくる
塩見允枝子（音楽家、作曲家、芸術資源研究センター特別招聘研究員）
2014年11月21日

3. 美術のウラ側にあるもの
彬子女王殿下（芸術資源研究センター客員教授・特別招聘研究員）
2014年12月12日

4. 3.11後に企画した展覧会とプロジェクト あいちトリエンナーレ2013を中心に
五十嵐太郎（東北大学大学院工学研究科教授）
2015年6月8日

5. フルクサス パフォーマンス・ワークショップ　実演を通してフルクサスを体験しよう
塩見允枝子
2015年6月16日

6. 国際展とキュレーション　今年のヴェネチア・ビエンナーレをふまえて
建畠 晢（多摩美術大学学長、芸術資源研究センター客員教授）
2015年7月23日

7. コレクションと芸術
彬子女王殿下
2015年10月7日、14日、21日、28日

8. 壁画は何をうつすのか　法隆寺金堂壁画の模写を通して
彬子女王殿下
2016年12月8日

9. 塩見允枝子「水を演奏する」2017
塩見允枝子
2017年11月17日

10. 日本文化を考える～明治の選択～
彬子女王殿下
2018年12月5日、12日

11. 塩見允枝子「時間と空間に分け入る」～フルクサス作品の演奏をとおして～
塩見允枝子
2019年10月30日

12. 日本文化を考える～令和からまなぶ～
彬子女王殿下
2019年11月27日、12月11日

講演会

1. イタリア未来派　芸術の革命
ルチャーナ・ガリアーノ（音楽学者、音楽美学者）
2015年11月20日

2. 伝統音楽における記譜について—声明と謡を中心に
藤田隆則（日本伝統音楽研究センター教授）
2016年2月17日

レクチャーコンサート

1. バロック時代の音楽と舞踏　記譜を通して見る華麗なる時空間
レクチャー｜柿沼敏江（音楽学部教授）、髙野裕子（芸術資源研究センター非常勤研究員）、三島郁（音楽学部非常勤講師）、赤塚健太郎（成城大学文芸学部芸術学科専任講師）
演奏｜樋口裕子（バロック・ダンス）、永野伶実（フルート）、大内山薫（ヴァイオリン）、頼田麗（ヴィオール）、三橋桜子（チェンバロ）
日時｜2015年10月18日
会場｜京都市立京都堀川音楽高等学校音楽ホール

2. 五線譜に書けない音の世界～声明からケージ、フルクサスまで～
レクチャー｜柿沼敏江、藤田隆則、竹内直（芸術資源研究センター非常勤研究員）、塩見允枝子
演奏｜大井卓也（ヴォイス）、上中あさみ（打楽器・ベル）、北村千絵（ヴォイス）、佐藤響（チェロ）、寒川晶子（電子ピアノ・トイピアノ）、鷹阪龍哉（声明）、橋爪皓佐（ギター）
美術｜二瓶晃
日時｜2017年2月26日
会場｜京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA

展示

1. 古橋悌二《LOVERS—永遠の恋人たち》展示・修復資料展示
日時｜2016年7月9日-24日
会場｜京都芸術センター 講堂（作品展示）、談話室（資料展示）
主催｜京都芸術センター（作品展示）、芸術資源研究センター（資料展示）

2.「Sujin Memory Bank Project # 01 デラシネ—根無しの記憶たち」
日時｜2016年11月12日-2017年2月19日
企画｜林田 新（芸術資源研究センター客員研究員）、髙橋耕平（アーティスト）
会場｜柳原銀行記念資料館
主催｜芸術資源研究センター、柳原銀行記念資料館

3. シンポジウム「過去の現在の未来 2」関連展示
日時｜2017年11月21日- 29日
会場｜兵庫県立美術館 アトリエ 1
主催｜芸術資源研究センター、國府理「水中エンジン」再制作プロジェクト実行委員会、兵庫県立美術館

4. 京都芸大「今熊野・岡崎学舎」井上隆雄写真展—もう一つの『描き歌い伝えて』—井上隆雄写真資料に基づいたアーカイブの実践研究
日時｜2018年2月7日-11日
企画｜山下晃平（京都市立芸術大学美術学部非常勤講師）
会場｜元崇仁小学校 南校舎2F
主催｜京都市立芸術大学芸術資源研究センター
協力｜小牧徳満（美術家）

5. Akira Otsubo「Shadow in the House」
日時｜2018年3月22日-31日
会場｜京都市立芸術大学 小ギャラリー
企画｜高嶋慈

主催｜京都市立芸術大学芸術資源研究センター

6. クロニクル京都 1990s—ダイアモンズ・アー・フォーエバー、アートスケープ、そして私は誰かと踊る
日時｜2018年10月6日-2019年1月20日
会場｜森美術館
主催｜森美術館
企画｜椿玲子（森美術館キュレーター）、石谷治寛
協力｜京都市立芸術大学芸術資源研究センター、ブブ・ド・ラ・マドレーヌ（アーティスト）、山中 透（ミュージシャン）、シモーヌ深雪（シャンソン歌手、ドラァグクイーン）、佐藤知久

シンポジウム

1. 創造のためのアーカイブズ Part1 未完の歴史
森村泰昌（美術家）、塩見允枝子（音楽家）、加治屋健司（広島市立大学芸術学部准教授）、石原友明（美術学部教授）、加須屋明子（美術学部准教授）
日時｜2012年10月7日
会場｜京都市立京都堀川音楽高校音楽ホール

2. 創造のためのアーカイブズ Part2 物質と記憶
下條信輔（カリフォルニア工科大学教授）、篠原資明（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）、建畠 晢（京都市立芸術大学学長）、高橋 悟（美術学部教授）
日時｜2012年11月7日
会場｜京都芸術センターフリースペース

3. 富本憲吉のことば
乾 由明（元兵庫陶芸美術館館長）、前﨑信也（立命館大学専門研究員）、森野泰明（陶芸家、日本藝術院会員）、柳原睦夫（陶芸家、大阪芸術大学名誉教授）、山本茂雄（富本憲吉文化資料館館長）、森野彰人（美術学部准教授）
日時｜2013年12月1日
会場｜京都国立近代美術館　講堂

4. 京都市立芸術大学芸術資源研究センター開設記念シンポジウム
井上安寿子（京舞井上流）、建畠 晢、門川大作（京都市長）、中村三之助（京都市会議長）、金剛龍謹・宇高竜成・宇高徳成（能楽金剛流シテ方）、京都市立芸術大学能楽部、藤田隆則（日本伝統音楽研究センター教授）、石原友明、柿沼敏江（音楽学部教授）、加治屋健司（芸術資源研究センター准教授・専任研究員）、鷲田清一（哲学者、大谷大学教授）、定金計次（美術学部教授・芸術資源研究センター所長）
日時｜2014年 年7月1日
会場｜京都市立芸術大学講堂

5. 来たるべきアート・アーカイブ 大学と美術館の役割
建畠 晢、青木 保（国立新美術館館長）、石原友明、川口雅子（国立西洋美術館情報資料室長）、谷口英理（国立新美術館情報資料室アソシエイトフェロー）、渡部葉子（慶應義塾大学アート・センター教授）、林 道郎（上智大学国際教養学部教授）、加治屋健司、定金計次
日時｜2014年11月24日
会場｜国立新美術館3階講堂

6. ほんまのところはどうなん、「アーカイブ」～初心者にもわかるアーカイブ論～
石原友明、加治屋健司、加須屋明子、佐藤守弘（京都精華大学デザイン学部教授）、林田 新（芸術資源研究センター非常勤研究員）、森村泰昌
日時｜2015年9月19日
会場｜京都芸術センター講堂
共催｜京都芸術センター

7. 過去の現在の未来 アーティスト、学芸員、研究者が考える現代美術の保存と修復
山梨俊夫（国立国際美術館館長）石原友明、植松由佳（国立国際美術館主任研究員）、金井 直（信州大学人文学部准教授）、マルティ・ルイツ（サウンド・アーティスト、バルセロナ大学美術学部研究員）、加治屋健司
日時｜2015年12月5日
会場｜国立国際美術館 B1 講堂
共催｜国立国際美術館

8. メディアアートの生と転生 保存修復とアーカイブの諸問題を中心に
石原友明、高谷史郎、加治屋健司（芸術資源研究センター特別招聘研究員、東京大学大学院総合文化研究科 超域文化科学専攻教授）、久保田晃弘（多摩美術大学美術学部教授）、畠中 実（NTTインターコミュニケーションセンター学芸員）、松井 茂（情報科学芸術大学院大学准教授）、佐藤守弘
日時｜2016年2月14日
会場｜元崇仁小学校

9. 古橋悌二《LOVERS—永遠の恋人たち》をめぐるトークイベント
阿部一直（山口情報芸術センターキュレーター／アーティスティック・ディレクター）、石谷治寛、石原友明、住友文彦（キュレーター／アーツ前橋館長）、高谷史郎（アーティスト）、建畠晢（京都芸術センター館長）
日時｜2016年7月18日
会場｜京都芸術センターフリースペース

10. 過去の現在の未来 2 キュレーションとコンサベーション その原理と倫理
石原友明、遠藤水城（インディペンデント・キュレーター）、白石晃一（アーティスト、ファブラボ北加賀屋）、高嶋慈、相澤邦彦（兵庫県立美術館保存・修復グループ学芸員）、加治屋健司、田口かおり（東海大学創造科学技術研究機構特任講師）、中井康之（国立国際美術館学芸課長）、小林 公（兵庫県立美術館学芸員）、飯尾由貴子（兵庫県立美術館企画・学芸部門マネージャー）
日時｜2017年11月23日
会場｜兵庫県立美術館 ミュージアムホール
主催｜芸術資源研究センター、國府理「水中エンジン」再制作プロジェクト実行委員会、兵庫県立美術館

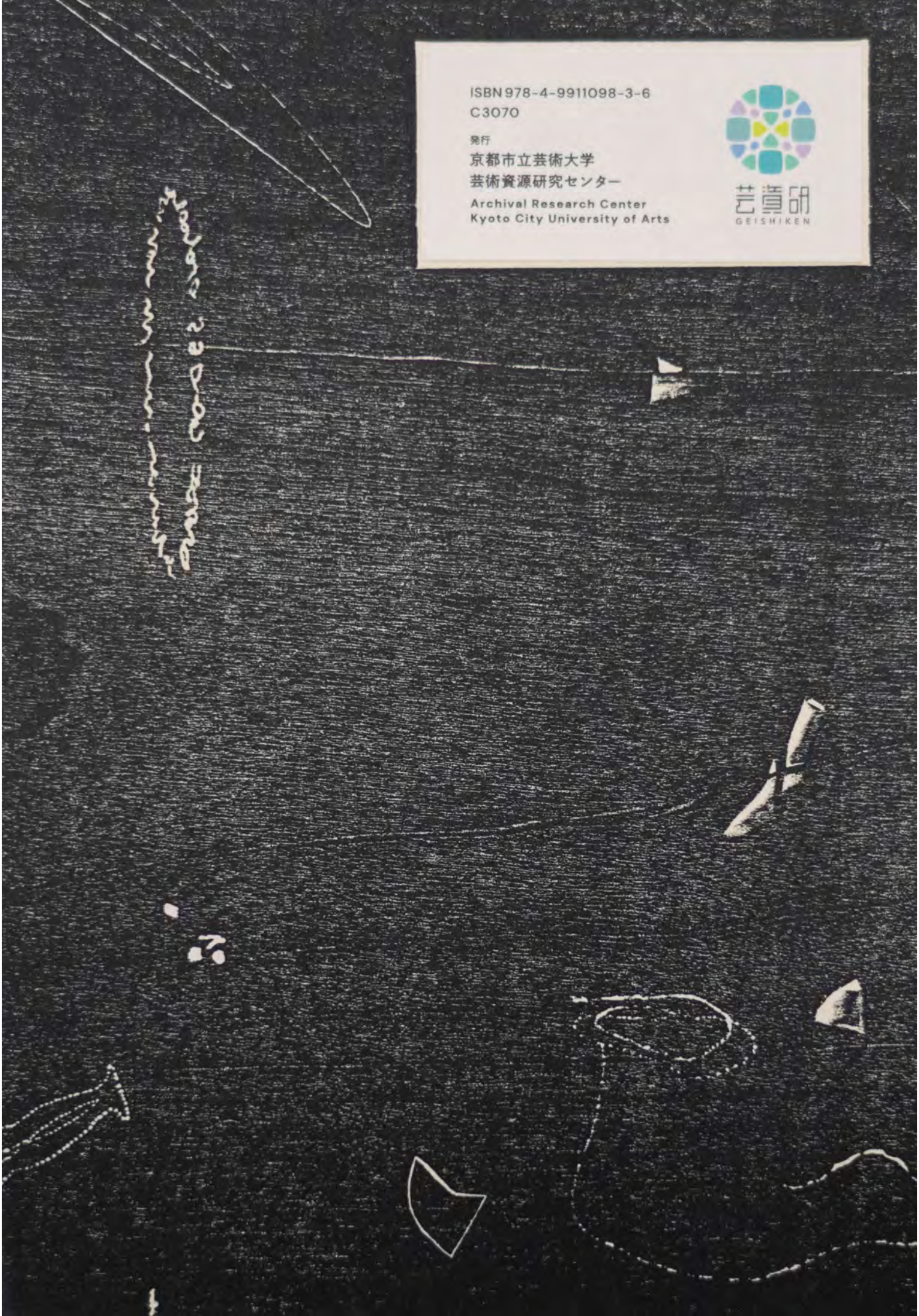
11. フルクサスを語る
柿沼敏江、一柳 慧（作曲家）、塩見允枝子、建畠 晢（美術評論家、多摩美術大学学長）、井上明彦（美術学部教授）
演奏｜大井卓也、上中あさみ、北村千絵、橋爪皓佐、山根明季子、ヤリタミサコ、本学学生12名
日時｜2019年1月19日
会場｜京都市立芸術大学 大学会館交流室、大学会館ホール

12. シンポジウムとコンサート「糸が紡ぐ音の世界」
伊藤 悟（国立民族学博物館外来研究員）、井上 航（国立民族学博物館外来研究員）、滝 奈々子（芸術資源研究センター非常勤研究員）、谷 正人（神戸大学）、藤野靖子（美術学部教授）、佐藤知久（芸術資源研究センター准教授）、柿沼敏江、藤枝 守（九州大学芸術工学研究院教授）
演奏｜中川佳代子、丸田美紀、大八木幸恵、渡部志津子（十七弦筝）
録音｜山口友寛
日時｜2019年2月16日
会場｜京都市立芸術大学 大学会館交流室、大学会館ホール

芸術資源研究センター スタッフ一覧

（2020年3月31日現在）

所　長 …… 石原友明（美術学部教授）
副所長 …… 山本 毅（音楽学部教授）
副所長 …… 武内恵美子（日本伝統音楽研究センター准教授）
専任研究員／教授 …… 佐藤知久
兼担教員 …… 森野彰人（美術学部教授）
非常勤研究員 …… 石谷治寛
同 …… 高嶋 慈
同 …… 滝 奈々子
同 …… 竹内 直
同 …… 山本 真紗子
客員研究員 …… 加須屋 誠
同 …… 川崎義博
同 …… 菊川亜騎
同 …… 林田 新
同 …… 前﨑信也
同 …… 牧田久美
同 …… 山下晃平（美術学部非常勤講師）
プロジェクト・リーダー …… 彬子女王殿下
同 …… 井上明彦（美術学部教授）
同 …… 大西伸明（美術学部准教授）
同 …… 岡田加津子（音楽学部教授）
同 …… 加治屋健司
同 …… 加須屋明子（美術学部教授）
同 …… 菊川亜騎
同 …… 佐藤知久
同 …… 砂山太一（美術学部講師）
同 …… 高嶋 慈
同 …… 高橋 悟（美術学部教授）
同 …… 高林弘実（美術学部准教授）
同 …… 竹内 直
同 …… 武内恵美子
同 …… 中ハシ克シゲ（美術学部教授）
同 …… 畑中英二（美術学部教授）
同 …… 深谷訓子（美術学部准教授）
同 …… 前﨑信也
同 …… 松尾芳樹（芸術資料館学芸員）
同 …… 森野彰人
同 …… 山下晃平
同 …… 山本 毅（音楽学部教授）
同 …… 横田 学（美術学部教授）
客員教授・特別招聘研究員 …… 彬子女王殿下
同 …… 森村泰昌
客員教授 …… 建畠 晢
特別招聘研究員 …… 塩見允枝子
同 …… 加治屋健司
事務局 …… 桐月沙樹
同 …… 鬼頭 謙
同 …… 吉川恭子



ISBN 978-4-9911098-3-6
C3070

発行
京都市立芸術大学
芸術資源研究センター
Archival Research Center
Kyoto City University of Arts

芸資研
GEISHIKEN